

日本人の檀君研究*

北山祥子**

【日文抄録】

本研究は、弘益財団が主管する『檀君・古朝鮮及び東アジア史定立のための韓日共同研究』において、弘益財団から提供された資料集『日本人の檀君研究』をテキストとして、近代日本人の檀君研究を実証的に解明し、その特質について総合的に把握することを目的とする。具体的には資料集で取り上げられた18編の檀君論について要諦の整理を行う。そのうえで執筆者である14名の日本人の履歴および経歴、社会的背景を勘案しながら、それぞれの檀君論が持つ特質とは何かを究明する。最終的には、史学史的視座も踏まえ、近代日本において俄かに形成された『日本人』というナショナル・アイデンティティが、日本人としての檀君研究に与えた影響について言及する。

【主題語】

檀君論, ナショナル・アイデンティティ, 近代歴史学, 建国神話, 日本人

* この論文は、韓国弘益財団の助成によるものであり、ここに感謝の意を表す。

** 北海道大学大学院 文学院 専門研究員

◆ 차례

はじめに

第1章 檀君論点描

第2章 日本人の檀君論分析

第3章 日本人の檀君論と植民地支配

おわりに

はじめに

資料集「日本人の檀君研究」では、落合直澄、林泰輔、吉田東伍、那珂通世、白鳥庫吉、坪井九馬三、日下寛、三浦周行、高橋亨、平岩佑介、小田省吾、稲葉岩吉、青柳南冥、今西竜ら14名が執筆した18編の檀君論が取り上げられている。分析は執筆者ごとに行うこととする。まずその檀君論の要諦を整理し、履歴や経歴、社会的背景をできるだけ明らかにしたうえで、それぞれの檀君論を分析する。次に各檀君論の独自性と関係性を明らかにし、日本人の檀君論の特質を解明する。最終的には、近代日本人のナショナル・アイデンティティと檀君研究の関係性を考察し、そのことが植民地朝鮮に与えた影響を史学史的視座から総括したい。

本研究では弘益財団提供の資料集を分析対象とするが、必要に応じて原文を確認し、誤字脱字は修正する。なお資料集からの引用については特に注をつけていない。

また旧漢字については可能な限り新字体に改めている。旧仮名遣いについては、極力原文のままとするが、踊り字のうちくの字点や、合略仮名については表記が困難なものがあるため、できるかぎり新仮名遣いに改めている。

第1章 檀君論点描

1. 落合直澄, 「檀君」『帝國紀年私案』, 飯島誠¹⁾, 1888(明治21)年.

「五十猛神ト檀君トハ同神ニシテ素盞鳴神ノ御子ナル」(資料集2頁).

落合直澄(1840-1891)は、江戸時代後期となる天保11年に生まれ、明治24年に亡くなった。「落合直澄先生瑩域」²⁾によると、幼少期から書に親しみ、早くから師について漢籍を読み詩文を学んだという。二十歳の頃には堀秀成³⁾に従い皇典を学び語学を習うが、1868(明治元)年、官軍に加わり戊辰戦争で功を立てたのち、東京に出て神祇官宣教権少博士に任官した。以降は1872年教部省中録、1873年豊受宮祓宜、度津神社宮司、出雲大社少宮司、1874年伊勢神宮祓宜権少教正、1878年少教正、1880年権中教正、1888年には神職の最高位となる大教正になる。この間布教はもちろんのこと、神宮や国教関連書の編纂、神宮教院本教館の学校長、神宮教本部長を歴任し、古書考究に励み、著作も多く執筆、1889年には皇典講究所の講師を務める。こうした経歴からは、落合が長く神職にあったこと、国学に精通していたことがわかる。なお『帝國紀年私案』は大教正となった年に発表された。

落合が檀君を素盞鳴神の息子である五十猛神と主張した要因の一つには、神官として、国学者として記紀⁴⁾は常に身近にあったことが影響

1) 資料集では出版者名を「吉川半七蔵版」としていたが、国会図書館所蔵の『帝國紀年私案』を確認したところ、中川半七は「売捌所」であり、出版者を「飯島誠」としていたため改めた。

2) 磯ヶ谷紫江, 『墓碑史蹟研究』第5巻, 後苑荘, 1927年, 593-594頁.

3) 1819-1887年, 国学者, 神官(国立国会図書館レファレンス協同データベース, 2016年11月15日更新情報, 参照).

4) 古事記・日本書紀.

したと考えられる。落合における国史とは記紀が前提になっていたといえるだろう。ゆえに「韓史ノ本邦ニ伝来スルモノ数種アリト雖モ三国史記東国通鑑ノ上ニ出ルモノナシ」5)、「我史ニ比較スレハ百濟記百濟新撰等ノ書ハ古事記日本紀ニ比スベク三国史記東国通鑑ハ大日本史ニ比スベシ…若シ世ニ韓史ナカリセハ千万歳ヲ経ルモ我史ノ紀年ヲ訂正シ其実ヲ見ルコト能ハザルナリ」6)とする『三国史記』7)と『東国通鑑』8)への高い評価は、朝鮮への関心よりも国史を補完するものとしての評価ととらえられるのである。

落合は『東国通鑑』外紀の檀君記事を記載しているが1667年に刊行された和刻版『東国通鑑』を底本にしたとすれば、林鶯峰が書いた序文に、「鴻荒の世に在りて、檀君、其の国を開く…我が国史を言え、これ則ち韓郷の島新羅の国また是れ素戔嗚尊の経歴する所なり、尊の雄偉、朴赫・朱蒙・温祚が企て及ぶ可きに非るときは、則ち推め三韓のこれ一祖と為せんもまた、誣しいたりとか為せざらんか」9)と述べられていることは認識していたはずである。よって落合の「檀君=素戔嗚神の息子五十猛神」という説は、林鶯峰の「素戔嗚神=三韓の一祖」から導き出されたと考えられる。実際のところ和刻版『東国通鑑』が出版されて以降、江戸時代における檀君論は、専ら記紀との比較と関連づけという文脈で語られていた10)。

さらに落合は江戸時代に書かれた史書『日本春秋』11)において、朝鮮

5) 落合直澄、『帝国紀年私案』飯島誠、1888年、21頁。

6) 同上、22頁。

7) 金富軾、『三国史記』、1145年。

8) 徐居正、『東国通鑑』、1484年。

9) 「新刊東国通鑑序」、『東国通鑑』巻之一、出雲寺松柏堂、1667年。引用に当たっては句読点を補い、仮名遣いを改めている。

10) 桜沢亜伊、「日本人の檀君論」(『東アジア—歴史と文化—』第20号、新潟大学東アジア学会、2011年3月)が詳しい。

11) 富永仲基(1715-1746)が構想した日本の通史を、友人だった僧日初寂蹟(1701-

では「伊檀君曾(いたきそ)」が檀君をさし、檀君の別称が「新羅明神」もしくは「日韓神」としていることを根拠に、檀君を「太祈(たき)」と称した。そのうえで五十猛神の別称が「伊太祈曾」あるいは「韓神曾保利」であることから、檀君と素盞鳴神の息子である五十猛神は同一神であると主張したのである。

2. 林泰輔, 「開國の起源」, 『朝鮮史』 卷1, 中川半七, 1892(明治25)年.

「其説荒唐ニシテ、遽ニ信ズヘカラズ...或人曰ク...五十猛神、一名ヲ韓神ト云ヒタレバ、事実大略符号セリ、亦牽強ニ近シ」(資料集3頁).

林泰輔(1854-1922)は、黒船来航後となる幕末の安政元年に生まれ、大正11年に亡くなった。『支那上代之研究』¹²⁾の巻末に付された年表を見ると、明治初年頃から並木栗水¹³⁾(1829-1914)に入門し漢学を修め、1883年東京大学古典講習科漢書課¹⁴⁾に入学、1887年卒業、1888年第一高等中学校の国語漢文の授業を囑託、1889年山口高等中学校の教務を囑託、

1770)が1766年に全50巻として完成させた(参照：吉田鋭雄・稲束猛 『池田人物史』 上, 太陽日報社, 1923年, 178-225頁, 「なにわ大阪を作った100人」第82話「関西・大阪21世紀協会」HP, https://www.osaka21.or.jp/web_magazine/osaka100/082.html, 2021年1月11日アクセス).

12) 林泰輔, 「年譜」, 『支那上代之研究』, 光風館書店, 1927年, 1-4頁.

13) 朱子学者, 易学者. 螟蛉塾を主宰する.

14) 古典講習科は1882年に臨時設置され、1888年に廃止されるまで本科学生を上回る88人もの卒業生を出した。古典講習科の各課は東京大学時代に始まったが、卒業は全て帝国大学に改組後である。帝国大学への移行により、古典講習科の生徒は官費支給の打切りや学士学位の不交付などの本科生との待遇格差が明らかになった(町泉寿郎, 「幕末明治期における学術・教学の形成と漢学」, 『日本漢文学研究』 11号, 二松学舎大学東アジア学術総合研究所日本漢文教育研究推進室, 2016年3月, 136-137頁).

1892年同校助教授(1895年疾病により退職), 1896年東京帝国大学文科大学助教授(1897年疾病により退職), 1899年東京高等師範学校講師に嘱託(1900年解職), 1902年文部省国語調査委員会補助委員及国語教科書編纂委員の嘱託(1904年国語教科書編纂委員解職, 1908年国語調査委員会補助委員解職)を経て, 1908年東京高等師範学校教授となっている。以上の経歴からは, 林がアカデミズムの中心となる東京帝国大学を卒業したとは言え, 学内においては待遇面で差別された臨時設置学科の出身であること¹⁵⁾, 東京高等師範学校教授となった54歳までは, 繰り返す疾病が原因となって職業的には安定していなかったことがわかる。なお, 1914年には「上代漢字の研究」によって文学博士号が授与され, 1916年には『周公と其時代』により帝国学士院恩賜賞を受賞した。

『朝鮮史』は, 山口高等中学校において教務から助教授になった年に発表したものである。第1篇の「総説」において朝鮮に興った最初の国家と認めたのは箕子朝鮮であり, 檀君についての言及はない。第3章「歴代沿革の概略と政体」は, 朝鮮に亡命した箕子から始まり, 衛満, 四郡二府までの中国人による国家と, それに続く新羅・高句麗・百濟による三国, 高麗, 朝鮮を列記している。政体については, 帝や崩, 陛下を使用しないことで中国に対して「王国ノ礼」をとり, 年号も中国のものを踏襲していると指摘し, 朝鮮が「真の独立国」とは言えないとした¹⁶⁾。

檀君は第2篇「太古史」の第1章「開国ノ起原」で登場する。

『東国通鑑』に書かれた「初無君長有神人…国号朝鮮」まではそのまま書き下し, 「是唐堯戊辰歳也」以降は文章の並びを変え, 補注の内容などを補足しながら「阿斯達山為神」までを引用している。一方で「東国史略

15) 注11を参照すること。

16) 林泰輔の『朝鮮史』については, 権純哲, 「林泰輔の『朝鮮史』研究の内容と意義」(『埼玉大学紀要(教養学部)第45巻第2号』, 埼玉大学教養学部, 2009年9月)が詳細に論じている。

ニ」と書かれている部分は柳希齡撰『標題音註東国史略』17)からの引用であって、朴祥撰『東国史略』からではない。なぜならば朴祥撰『東国史略』18)は「檀君姓ハ桓氏」から始まらず、全体を通してほぼ『東国通鑑』と同じだからである19)。

画像1. 朴祥撰『東国史略』と柳希齡撰『標題音註東国史略』の比較



朴祥撰『東国史略』20)(京都大学所蔵)

柳希齡撰『標題音註東国史略』21)(内閣文庫所蔵)

- 17) 柳希齡, 『標題音註東国史略』, 不明. 柳希齡の生没年が1480-1552年であることから, その間に書かれたものである. 日本で確認できるものは内閣文庫所蔵の写本である.
- 18) 朴祥撰, 『東国史略』, 1522年.
- 19) 現在, 日本で確認できるものは朴祥撰と柳希齡撰の二種類である. 桜沢亜伊, 『「東国史略」の諸本について』(『資料学研究』3号, 新潟大学大学院現代社会文化研究科プロジェクト, 「大域的文化システムの再構成に関する資料学的研究」, 2006年3月)が詳細に論じている.
- 20) 朴祥撰, 『東国史略』巻1, 1522年(京都大学貴重資料デジタルアーカイブ所蔵).
- 21) 柳希齡撰, 『標題音註東国史略』

畫像2. 朴祥撰『東國史略』と『東國通鑑』の比較

『東國通鑑』²²⁾(早稲田大學所藏) 朴祥撰『東國史略』(京都大學所藏)

さらに朴祥撰『東國史略』では、檀君について「神寿四千十八」としている²³⁾が、『標題音註東國史略』は「一千五百年」としている。以上の検証から、林は『東國通鑑』と『標題音註東國史略』をテキストとして使用したと考えられる。

林の檀君認識は明快であって、「荒唐無稽な説」、「にわかには信ずるべきではない」と言い切り、「或人」とは落合直澄のことだが、落合の「五十猛神=檀君」説に対しても「道理に合わないことを無理にこじつけているのに近い」とにべもなく否定した。このような林の見解に対して、林泰輔に関する研究論文が多い権純哲は、林は「制度や科学技術における

22) 『東國通鑑』(出典：早稲田大学古典籍データベース『東國通鑑』 卷之一)

23) 桜沢亜伊、「『東國史略』の諸本について」によると、日本に現存する朴祥撰『東國史略』は六種ある。内閣文庫所蔵本、京都大学所蔵本のいずれもが「神寿四千十八」となっている。また内閣文庫所蔵の『朝鮮史略』においても同様に「神寿四千十八」となっている。

朝鮮文化の優秀さ」, 「科学的合理的文化要素に注目しそれを高く評価していたことから, 落合説への批判は当然のことであり, 近代「国学」への警戒心からだとしている²⁴⁾.

3. 吉田東伍, 「朝鮮」, 『日韓古史断』, 富山房書店, 1893 (明治26)年.

「朝鮮の古史全く欠け, 後人強説して錯乱最甚し」(資料集4頁).

「韓史開国の最古を談し, 檀君首に出て平壤に都邑す, 是れ帝堯戊辰の歳なり...決して信すへからず...後世に至り其の草昧を談して之を神にしたるのみ」(資料集5頁).

吉田東伍(1864-1918)は江戸時代末期となる元治元年に生まれ, 大正5年に亡くなった. 『故文学博士吉田東伍先生略伝』²⁵⁾によると, 1874年10歳の時に小学校をやめ, 新潟英語学校に入学するが, 1877年に退学している. 1883年第二種小学校教員試験に合格し教員となるが, 1884年教員をやめ新潟学校師範部に入学するも退学, 1885年仙台兵營に志願入隊, 1886年除隊, 1887年高等小学校教員検定試験に合格, 1889年に小学校教員退職後は, 雑誌や新聞に論文を寄稿し, それらをまとめたものを出版した. 1895年地名辞書の編纂を計画, 1907年第5巻及び索引の出版で完了, 1909年『大日本地名辞書』により文学博士号授与, 1904年頃から東京帝国大学史学会, 地学協会などからの講演依頼を受け, 1908年早稲田大学地方講演, 1909年国学院大学, 歴史地理会講演など1913年頃まで精力的に歴史講演を行う. 1908年から『倒叙日本史』を編纂し1914年までに全10巻出版した²⁶⁾. 1901年東京専門学校(1902年早稲田大

24) 権純哲, 「林泰輔の「朝鮮史」研究の内容と意義」(『埼玉大学紀要(教養学部)第45巻第2号』, 埼玉大学教養学部, 2009年9月, 85-86頁).

25) 高橋源一郎, 『故文学博士吉田東伍先生略伝』, 非売品, 1919年.

学と改称)講師, 1911-1918年早稲田大学教授, 1917年早稲田大学理事²⁷⁾となっている。このように小学校を卒業せず, 定職にもほとんど就かないまま文学博士となった吉田東伍は, 明治大正期の「立志修養」, 「立志成功」, 「立志伝」といった書籍において幾度も取り上げられた²⁸⁾。

表1. 太古紀年表

私考時代					皇孫凡三世とす故に今孝定して百年許りとなすなり	
本邦記事	上世謂はゆる神代の際辺焉考ふへからず	二尊初めて国土を平定せらる	天祖照臨せらる	素戔鳴尊韓郷の島に行かせらる	天日槍辰国より来帰する	皇孫降臨三世の間は西偏にましませり
書紀年暦配当	第4世紀		第5世紀		第6世紀	
諸韓朝鮮紀年	朝鮮人云ふ檀君開国と其の事痛く前後を誤る漢人伝ふ周代の初め箕子朝鮮に入ると今を去ること実に三千年と為すなり真に然るや否や			衛滿朝鮮を奪ふ箕準馬韓に奔る		
漢暦配当	戦国			秦代	漢初	
西暦配当	紀元前3世紀			紀元前2世紀		

上記の表1は第1編「太古紀」の第1章にある「太古紀年表1」²⁹⁾を抜粋したものである。「西暦配当」で「紀元前三世紀」にあたる「本邦記事」は、「二尊初めて国土を平定せらる」, 「天祖照臨せらる」, 「素戔鳴尊韓郷に行かせらる」, 「天日槍辰国より来帰す」と書かれ, 記紀の神代どおりで

26) 同上, 1-26頁。

27) 「吉田東伍の経歴」, 『阿賀野市HP』, <https://www.city.agano.niigata.jp/soshiki/shogaigakushuka/shogaigakushu/3/4/3053.html>, 2021年2月1日アクセス。

28) 田部備山, 『現代名士伝: 立志修養』(修文館, 1912年), 田村浩, 『少年のために: 立身成功の基』(三友堂書店, 1913年), 秋野村夫, 『名士立伝』(元文社, 1916年), 大日本青年教育会編, 『世界名士立伝』(大日本青年教育会, 1917年), 大日本青年教養団『東西名士立志伝: 独力奮闘』(朝日書房, 1926年)などで取り上げられている。

29) 吉田東伍, 『日韓古史断』, 富山房書店, 1893年, 20-21頁。

ある。それ以前は、「上世謂はゆる神代の際辺焉考えず」と書かれ、同時期の「諸韓朝鮮紀年」には「朝鮮人云ふ檀君開国と其の事痛く前後を誤る漢人伝ふ周代の初め箕子朝鮮に入ると今を去ること実に三千年と為すなり真に然るや否や」として、日本の国産み以前に存在することになる檀君と箕子を否定している。また吉田が、国産み以前を神代と考えていたことがわかる。

第2章「筑紫及び韓郷之島」では、伊弉諾伊弉冉の国産みについて「是レ国土を平定したまへるなりとの説、最モ妥当なると覚ゆ」と肯定し、以降ほぼ記紀の内容と変わらない。当然のことながら素戔鳴と五十猛の渡韓についても「韓郷の島あり、素戔鳴尊始めて其の子五十猛を携へ渡航して其の一部を占領したまふ、謂はゆる新羅曾尸茂梨の所是なり」と記している。一方で、第3章の「半島諸国」で言及する朝鮮については、箕子すら否定していることから、檀君に至っては数行を割いて「決して信すへからず」と断じた。吉田は「韓史」が何を指すのか明らかにしていないが、早稲田大学図書館が所蔵する「吉田東伍旧蔵」書籍に『東国通鑑』があることから、これをテキストにしたと考えるのが妥当だろう。しかし箕子の記事において『三国遺事』を引用していることから、東京帝国大学版の出版以前ではあるが、『三国遺事』を使った可能性も考えられる。

4. 白鳥庫吉、「檀君考」、『学習院輔仁会雑誌』第28号、
 学習院輔仁会、1894(明治27)年1月 / 「朝鮮の古伝説考」、
 『史学雑誌』第5編第12号、日本史学会、1894(明治27)
 年12月

①「檀君考」、『学習院輔仁会雑誌』第28号、学習院輔仁会、1894(明治27)年1月。
 「魏書の：引用者挿入）事蹟をして一層妄誕ならしめ爾も其の妄誕なる

丈に還てその本色を露呈せる古記の存するをや、そは『三国遺事』卷一に載せたる檀君の伝説とす」(資料集31頁).

「初の古記に伝説を付会して益々事実を妄誕ならしめたる者と解する人もあらん…深く此伝説の性質を考ふるに妖怪妄誕を極めたる『遺事』の記事が還てその本色を顕すものにて彼の省略に従へるは史家が事実を真しやかに書き伝へんが為めに故ざと怪しき部分を削除せし者なり。蓋し檀君の事蹟は元來伝説に根拠せる架空の仙譚なればなり」(資料集32頁)

②「朝鮮の古伝説考」、『史学雑誌』第5編第12号、日本史学会、1894(明治27)年12月.

「朝鮮の古伝説の中にて、最も妄誕を極めたるは檀君の伝説とす。檀君の事は漢史に見えず、さるを『三国遺事』卷一には、『魏書』に乃往二千載、有檀君王儉、立都阿斯達、開国号朝鮮、与高同时。とある由を知るせるは如何にや」(資料集47頁).

白鳥庫吉(1865-1942)は、江戸時代末期の慶応元年に生まれ、昭和17年に亡くなった。「白鳥博士小伝」³⁰⁾によると、1879年千葉中学校入学³¹⁾(1883年千葉中学校卒業)、1883年東京大学予備門入学(1886年卒業)、1886年第一高等中学校第2年編入、1887年東京帝国大学文科大学史学科入学(1890年卒業)、1890年学習院大学教授になる。専攻は西洋史だったが、支那周辺諸民族の歴史を担当したことから、東洋諸民族の研究に手を染めた。1901年ヨーロッパ留学、1904年には学習院大学との兼任で東京帝国大学文科大学教授となり、史学科において「漢文支那語学第三講座

30) 津田左右吉。「白鳥博士小伝」、『津田左右吉全集』第24巻、岩波書店、1965年、109-161頁。

31) 津田は白鳥の入学時について、以下のように述べている。「師範学校の校長であつた那珂通世氏が、総理(校長)を兼ねてゐたのであるが、同氏はその年に東京に転任を命ぜられた。その翌年、三宅米吉氏が教師として来任したが、氏もまた、14年に、同じく東京に転任した。博士が中学生として両氏の教をうけられたのは、何れも短い間ではあつたが、その感化は少なかつたろうと推測せられる」(同上、112頁)。

分担」の講義を担当する。1905年亜細亜学会を創設、1907年東洋協会と合併したのちは、学術調査部において東洋学研究に従事し、満鉄東京支社に働きかけ満鮮史研究のための「歴史調査室」を1908年に設置した。1914年からは7年にわたり東宮御学問御用掛、御学問所教務主任を務めた。1921年に学習院大学教授退任すると、1924年には東洋文庫設立に尽力し、理事および研究部長に就く。1925年東京帝国大学教授を定年退官、1929年には史学会理事、1934年には日本民族学会理事長、1939年には東洋文庫理事長に就任するなど学術的要職を歴任した。昭和に入ってからも広島文理科大学、大正大学、立教大学、国学院大学などから要請を受け東洋史学の講義を行った。

日本に近代歴史学をもたらしたと言われるルートヴィヒ・リースは、1887年に新たに開設された史学科の講師として赴任しているが、白鳥は最初の学生である。学習院大学教授時代の1900年には、博士会から博士の学位を授与された³²⁾。これについて津田左右吉は、ヨーロッパで白鳥の名前が知られ始め、1900年にヨーロッパの雑誌に論文が掲載されたことがきっかけとなり、日本国内の学会でも功績が評価されたと記している³³⁾。

以上の経歴からも明らかなおり、白鳥は生涯にわたって日本のアカデミズムの中枢に存在していたといえる。東京帝国大学史学科で近代歴史学を日本へもたらしたリースの薫陶を受け、学習院大学教授を務めながら母校である東京帝国大学史学科教授として定年退官まで教鞭をとり、学会や研究機関設立に尽力し、各団体の重鎮としての役割を担った。そのうえ東宮時代の昭和天皇に「国史」教育を授ける³⁴⁾という大

32) 『官報』1900年7月12日。

33) 津田左右吉、前掲書、128頁。

34) 白鳥庫吉、『昭和天皇の教科書 国史』、勉誠出版、2015年。御用掛は1914年から昭和天皇が渡欧する1921年まで務めた(736頁)。

業も果たしている。ただ大学院に進まなかったことから、長く博士号の取得がかなわなかったが、海外での評価が追い風となって、博士会からの承認を得た³⁵⁾。

学術的に檀君を批判した最初の人物は白鳥庫吉と考えていいだろう。『三国遺事』をテキストに、そこに見られる仏教思想を詳細に分析し、「檀君の事跡は元来仏説に根拠せる架空の仙譚」³⁶⁾、「檀君の事は全く仏説の牛頭旃檀に根底せる仮作譚なり」³⁷⁾、「檀君の伝説愈々仏説の仮作譚と定まる」³⁸⁾、「檀君が愈々高句麗人の手に成れる仮作譚なる事に誤謬なからしめ」³⁹⁾と厳しく断じている。また白鳥は仏説をとる理由として、高句麗の長寿王13(425)年から始まった北魏への朝貢によって、当時北魏において最盛期を迎えていた仏教が、高句麗に渡り隆盛したことを挙げ、これを根拠に檀君神話成立の時期を長寿王の時代(在位期間413-491年)とすべきと主張した⁴⁰⁾。そのうえで、「檀君の伝説は当時の思想を彰表(マ)する歴史上格好の記念物」⁴¹⁾だと結論づけている。ちなみに「檀君考」では、檀君伝説が生じた時代を、仏教の朝鮮渡来時期と『魏書』編纂時期から類推すれば372年から551年までの179年間の間にあると述べているが、これに対して那珂通世が「朝鮮古史考」において「檀君ノ伝記ノミハ漢史ニ本ヅキタルニ非ズシテ全ク朝鮮人ノ作りタル者

35) 「勅令第344号学位令」、『官報』第4635号、1898年12月10日。第2条2項に「博士会ニ於テ学位ヲ授クヘキ学力アリト認メタル者」とある。1887年公布の学位令では「博士ノ学位ハ文部大臣ニ於テ大学院ニ入り定規ノ試験ヲ経タル者ニ之ヲ授ケ又ハ之ト同等以上ノ学力アル者ニ帝国大学評議会ノ議ヲ経テ之ヲ授ク」としていた。

36) 白鳥庫吉、「檀君考」、『白鳥庫吉全集』第3巻、岩波書店、1970年、2頁(初出は、『学習院輔仁会雑誌』第28号、1894年1月)。

37) 同上書、4頁。

38) 同上書、6頁。

39) 同上書、9頁。

40) 同上、11頁。

41) 同上書、14頁。

ナリ」42)と主張したことを受けて、「朝鮮の古伝説考」においては「檀君の事は漢史に見えず」43)と改め、『魏書』を根拠とすることに疑問を呈した44)。また那珂が「此ノ伝説ハ、仏法東流ノ後、僧徒ノ捏造ニ出デタル妄誕ニシテ、朝鮮ノ古伝ニ非ザル事ハ、一見ニシテ明カナリ」と述べていることに同意しながらも、「此の妄説には、妄説だけの結構工夫あり」45)として、他の古記と比較検証を行っている。しかし結果的には、「高句麗の祖先として其国の僧侶輩が仮作せる人物なりと解釈すべき」46)であり、「朝鮮の古伝説の中にて、最も妄誕を極めたるは檀君の伝説とす」47)と結論づけた。以上のことから、白鳥の主張が以降の研究に影響を与え、特に植民地朝鮮における檀君批判や檀君否定の基礎となったことは明らかである。

5. 那珂通世, 「朝鮮古史考」, 『史學雜誌』 第5編第3-4號,
日本史學會, 1894(明治27)年3月-4月.

「三国史記ニ次ギタル朝鮮ノ古史ハ、三国遺事ナリ...書中ノ記事ハ、怪詭神異ノ談ノミ多ケレドモ、東国通鑑ニハ往々之ニ拠レル所アリ...朝鮮ノ世ニ至リテハ、吉昌君権近ノ東国史略、達城君徐居正等ノ東国通鑑某氏ノ東史宝鑑ノ類アレドモ、三国時代ノ事ハ、皆三国史記ヲ節録シタルニ過ギザレバ、異聞ヲ広ムル所、殆ト無シ」(資料集10頁).

「(『東国通鑑』外紀の：引用者挿入)発端ニ記シタル檀君ノ伝記ノミハ、漢史ニ本ヅキタルニ非ズシテ、全ク朝鮮人ノ作りタル者ナリ」(資料集15頁).

42) 那珂通世, 「朝鮮古史考」, 『史学雑誌』 第5編第4号, 史学会, 1894年4月, 41頁.

43) 白鳥庫吉, 「朝鮮の古伝説考」, 『白鳥庫吉全集』 第3巻, 岩波書店, 1970年, 15頁(初出は, 『史学雑誌』 第5編第12号, 史学会, 1894年12月, 9頁).

44) 同上.

45) 同上, 17頁.

46) 同上, 19頁.

47) 同上, 9頁.

「『三国遺事』が：引用者挿入)檀君ノ名ヲ王儉トシタルハ、平壤ノ旧名ナル王陰ノ陰ノ字ヲ人扁ニ易ヘタルナリ。此伝説ハ、仏法東流ノ後、僧徒ノ捏造ニ出デタル妄誕ニシテ、朝鮮ノ古伝ニ非ザル事ハ、一見シテ明カナリ…(『東国通鑑』外紀は：引用者挿入)「全ク僧徒ノ妄説ヲ歴史上ノ事実ト為シテ、之ヲ節録シ、唯其ノ在位ノ年数ハ、権近ノ東国史略ニ拠リテ、千四十八年トセリ。其ノ条下ニ史臣ノ案ヲ記シテ、「前輩以謂、其曰千四十八年者、乃檀氏伝世歴年之數、非檀君之寿也、此説有理」ト云ヒタレドモ、「載籍無徵」ト云ヘル時代ノ事ニシテ、証トスベキモアルニアラズ、且後世ノ僧徒ノ妄説ニ就キテ、強テ理解ヲ下サント欲スルハ、甚謂レナキ事ナリ」(資料集16頁)。

那珂通世(1851-1908)は、江戸後期の嘉永4年に生まれ、明治41年に亡くなった。『文学博士那珂通世君伝』⁴⁸⁾によると、1867年養父江幡通高が教授を務める藩校作人館(盛岡藩)において句読師(生徒に漢文の素読を授ける役目：引用者注)、1872年慶応義塾に入塾(1875年卒業)、1875年山口県巴城学舎教師(1876年退職)、1877年千葉師範学校及び千葉女子師範学校教師長、1878年千葉師範学校長兼千葉女子師範学校総理、1879年東京女子師範学校訓導に転任、1880年東京女子師範学校訓導兼幹事、1881年東京女子師範学校長兼教諭、1885年東京師範学校教諭、1886年非職、1888年高等師範学校幹事、転職して元老院書記官、1889年元老院廃止により非職、1891年華族女学校教授(1893年非職)、第一高等中学校支那歴史授業嘱託、1893年高等師範学校支那歴史講義嘱託、第一高等中学校漢文及支那歴史授業嘱託、1894年第一高等中学校教授兼高等師範学校教授、1895年高等師範学校教授兼第一高等学校教授、1896年東京帝国大学文科大学講師(1904年解職)、1903年早稲田大学東洋史講師、1904年浄土宗大学仏教地理講師と転職が続く。養家が困窮を極めていた那珂は就学、就職においても苦労を重ね、その収入は一家を養うた

48) 故那珂博士功績紀年会、『那珂通世遺書』、大日本図書、1915年。

めに費やされた49)．生活に追われながらも、1888年には全6巻からなる『支那通史』を出版するなど研究をすすめ、1901年には博士会から文学博士が授与50)されている。

那珂が「朝鮮古史考」において『三国遺事』、『東国通鑑』をテキストとしたことは、内容から言っても間違いないだろう。ただし論文が発表された1894年当時、文科大学版の『三国遺事』が出版されていないことから、どの『三国遺事』をどのように入手したのかは不明である。また「(檀君の：引用者挿入)在位ノ年数ハ、権近ノ東国史略ニ拠リテ、千四十八年トセリ」としているが、先行研究によると権近撰『東国史略』は「巻三から四の一冊しか現存していない」51)ことから、檀君に関する記事がないため、果して権近撰『東国史略』かどうかは不明である。さらに先行研究では、「(権近撰『東国史略』は：引用者挿入)当初の書名が『三国史略』であったことや、権近の文集である『陽村集』等に収録された史論から、三国時代を中心として新羅の滅亡まで記述されていたものと推測」52)されるとしており、そもそも権近が古朝鮮や檀君について書いていたかどうかも明らかになっていない。また林泰輔のところで述べたとおり、日本に所在する『東国史略』のうち、朴祥撰では檀君の年齢を「四千十八」、柳希齡撰では「一千五百」としていることから、那珂が言う「千四十八年」とは『東国史略』ではなく『東国通鑑』を引用したものではないかと思われる。

いずれにしても那珂の檀君認識も白鳥の「伝説」と変わらず、檀君伝説を厳しく批判した。

49) 前掲書，故那珂博士功績紀年会『那珂通世遺書』，51-52頁。

50) 『官報』1901年4月27日。

51) 前掲書，桜沢亜伊「『東国史略』の諸本について」，29頁。

52) 同上。

6. 坪井九馬三・日下寛、『三國遺事』上，文科大学史誌叢書，吉川半七，1904(明治37)年。

「校訂三國遺事叙 三國遺事. 繼金氏史記而作. 収録新羅高句麗百濟三國遺聞逸事者. 高麗忠烈王時僧一然所撰也. 書凡五卷. 分為九門. 初無序跋. 冠以三國年表. 所紀神異靈妙. 專主崇仏弘法. 論者謂荒誕不經. 不足取信. 然流風遺俗. 往往散見於其中. 矧州郡都市. 地勢沿革. 歷然有徵. 苟欲講三國旧事. 采葑采菲. 寧容遺之哉. 其書以元大德間成. 後二百余年. 迨明正德七年壬申再刊. 慶州府尹李繼福跋其後云. 吾東方三國. 本史遺事兩本. 他無所刊. 而只在本府. 歲久剝欠. 一行可解僅四五字. 因欲改刊. 広求完本. 閱數歲不得焉. 星州牧使権公. 聞余之求求. 得完本送余. 盖再刊之舉. 出於繼福. 而所謂完本者. 亦非真完本. 恐闕損写本已. 我邦所伝有二本. 一在尾州徳川候. 一蔵男爵神田氏. 並係正德再刊. 文字摸稜. 魯魚焉馬. 率仍其旧. 甚則空紙脫葉. 文斷義絶. 殆不可読. 於是原二家蔵本. 挾三國史記・高麗史・朝鮮史略・東国通鑑・文献備考・輿地勝覽・海東金石苑・及漢土歴代史書. 西域求法高僧伝・唐統高僧伝等. 參互檢覈. 訂其譌舛. 補其闕漏. 活字印行. 以公於世. 至元距今六百余年. 元主忽必烈置征東省. 以高麗為導. 來寇於我筑紫. 鎮西諸軍擊殲之. 戰敗之余. 麗主至欲驅儒生充軍伍. 而一然以高麗人. 屹屹著書於其間. 惜不使其筆當時曲折. 取信於天下後世. 抑三韓与我關係. 邈在往世. 此書所載. 有問及我者. 且書中挿入郷歌者. 多係新羅語. 郷歌猶謂国風. 新羅古言已亡. 纔存郷歌十余首. 実為滄海遺珠. 則匪直覈新羅旧事. 亦足以參我古言. 考古之士. 討其源而究其委. 庶幾乎其有所資焉. 明治三十五年壬寅九月上澣」⁵³⁾(「校訂三國遺事叙」, 『三國遺事』上, 文科大学史誌叢書, 1902年).

日下寛(1852-1926)は、江戸時代後期の嘉永5年に生まれ、大正15年に亡くなった。『常総名家伝』第1巻⁵⁴⁾によると、幼少のころから古河藩の藩校である盈科堂で学び、武道を教武場で修め、1868年東京に出て漢学者川田甕江の門下生となる。数年学んだのち、旅に出て戻ると、川

53) 「資料集」に掲載されたものは一然による『三國遺事』を掲載したものであるため、「校訂三國遺事叙」を分析することとして掲載した。

54) 木戸偉太郎、『常総名家伝』第1巻，会始書館，1890年，80-85頁。

田が修史局で歴史編纂に従事していたことから、1875年からともに出仕するようになる。1877年に修史局が修史館へと縮小されると、恩師川田は宮内省へ転出(1881年)するが、1886年内閣臨時修史局、1888年東京帝国大学臨時編年史編纂掛、1891年史誌編纂掛と組織の形態が変わっても、日下は一貫して奉職を続けた。この間直属の上司となった重野安繹の信頼を受け、専ら史筆を任される。一方で友人らと廻瀾社という文社を作り、文字の講習を行い、詩文を作った。また『新撰漢文読本教授参考』巻155)には、史料編纂掛と東京帝国大学史学科講師を兼ねていたと書かれている。『文科大学史誌叢書』シリーズは1897年から1913年にかけて出版されているが、多くの校訂を坪井九馬三と日下寛が担った。

坪井九馬三(1859-1936)は、江戸末期となる安政6年に生まれ、昭和11年に亡くなった。『日本博士全伝』⁵⁶⁾によると、1872年大坂開成学校に入り、あわせて造幣局が作った日進学舎で普通学を修めた。1873年大坂開明学校、1874年東京外国語学校(1875年卒業)、1876年東京大学文学部政治理財科入学(1881年卒業)、1881年理学部入学(1885年卒業)、1883年文学部史学科で講義、理学部卒業後東京大学御用掛及び理学部化学場勤務、1886年東京帝国大学文科大学講師、東京大学予備門で理財学担当、第一高等中学校理財学教師、1887年ドイツ留学(1891年帰朝)、1891年文学博士「帝国大学評議会ノ議ヲ経テ授与」⁵⁷⁾、10月文科大学教授となる。また「坪井九馬三関係資料」⁵⁸⁾によると、文科大学では史学・地理学講座を担当、在任中は附属図書館商議委員、1897年東京帝国大学評議員、1900年帝国学士院会員、1904年~1912年文科大学長を務め、1923

55) 光風館編輯所、『新撰漢文読本教授参考』巻1, 光風館書店, 1929年, 101頁。

56) 花房吉太郎, 山本源太編『日本博士全伝』, 博文館, 1892年, 37-39頁。

57) 『官報』1891年8月25日。

58) 「坪井九馬三関係資料」 「東京大学学術資産等アーカイブズポータル」HP, <https://da.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/portal/assets/5db91f08-d932-4570-817e-38ba03b0334c>, 2021年2月10日アクセス。

年に退官した。この間多くの著作の執筆、史料編纂を行っている。

弘益財団提供の資料集では、一然による『三国遺事』を掲載しているため、編者の檀君認識を「校訂三国遺事叙」から確認することとする⁵⁹⁾。なおこの「校訂三国遺事叙」は日下によるものである⁶⁰⁾。

「校訂三国遺事叙」では、『三国遺事』が「神異靈妙」,「専ら崇仏弘法を主」であるとし、論者らからも「荒誕不經取るに足らず」と論評されているが、上から下々に伝わった風俗風習や今に残る古来の風俗が書中に散見し、州県都市や地勢沿革が歴然と見受けられ、仮に三国の旧事を講義しようと思うならば、一部の欠点によって長所まで否定してはならないと述べ、『三国遺事』の価値を認めているとみることができる。

一方、坪井の見解は、『史学雑誌』に発表した解題で確認できた⁶¹⁾。以下に一部を抜粋する。

「本書の記事に妄説多しとて朝鮮に於ても本邦に於てもとかく世の史家より擯斥せらるゝ例なれと本書の坊主臭きは誠に己を得ざる事情に出るなり即本書の多く集めたる新羅の伝説は其实質に於て既に坊主臭く撰述者は無垢の坊主固より臭く撰述年代又無比の仏教熱に浮かされたる時にて其臭きこと言ふを待たす…新羅の文化は仏教の伝来に萌し智証王の世初梁始て有史時期に入り王の子法与王の時仏教弘揚に連れて文化興り法与王に續きて立ちたる姪真与王の六年(梁の大同十一年)に始て国史を修めしめ…然れとも仏教の紹隆に国家の勢力を糜して遂に邦家為に覆り後高麗續きて起りしも積弊の伏在する根抵を察するに能わす旧に依り「弘揚仏法以維持馴致邦家之怙泰」せんとせること実に忠宣王の言の如し之を以て新羅の古伝説は仏教伝説の換骨脱体となり新羅の文学は概ね僧徒の手に成り…新羅文学の大勢は大略上に述べたるか如し其技芸に於ても

59) 分析にあたっては、青柳綱太郎『原文和訳対照三国遺事全』(朝鮮研究会, 1915年)の書き下し文を参考にしている。

60) 日下寛子栗、『鹿友莊文集』巻1, 野田文之助, 1924年。自著を集めた文集に「校訂三国遺事叙」が掲載されている。

61) 坪井九馬三, 「三国遺事」, 『史学雑誌』第11編第9号, 史学会, 1900年9月。

亦然るに似たりされは新羅古伝説は之を極言すれば猶ほこおるたあるの
 こときかこおるたあるのものたる奇臭を放ち汚穢太甚しく棄てんにも処
 なきに苦む始末なれと精しく之を分溜する時は貴重なる薬品有益なる燃
 料を得へし新羅古伝説も之に類し一読近き難きやに見ゆれと能く分溜せ
 は純粹なる古伝を収めて新羅古代の人情風俗を察すべく以て新羅史の基
 礎を置く材料に充へからん然れとも余は未だ新羅古伝説を分溜したるに
 非ず唯理論としてかくいふのみ白鳥庫吉氏は曾て分溜に着手せられたる
 ことあり其檀君考、朝鮮古伝説考、朝鮮古代諸国名称考、朝鮮古代地名考、
 朝鮮古代王号考、朝鮮古代官名考等皆氏の分溜成績を報するものなり世
 の朝鮮古伝説分溜に志ある士は就て精読し給ふへし」⁶²⁾

白鳥や那珂、後述する小田らは、檀君神話について「仏説」、「妄誕」、「僧
 徒の捏造」といった厳しい指摘や批判を行ったが、坪井の批判もまた痛
 烈である。要約すると、新羅古伝説にまとう坊主臭は、コールトールの一
 ようなものか、あるいはコールトールそのものの異臭を放ち、汚れが甚
 だしく、棄てる場所にも困るが、貴重な薬品と有益な燃料を得て、分別
 蒸留を行えば純粹な古伝が抽出されるということになる。いかにも理
 学部出身者らしい比喻を交えた辛辣な言い様だが、当時の日本人研究
 者らが抱いた仏教色に対する強い忌避感は、明治政府が神道の国教化
 政策を実施するため、1868年に出した「神仏判然令」⁶³⁾や1870年の「大教
 宣布」⁶⁴⁾による国家神道の徹底政策が大きく影響したように思われる。

62) 坪井九馬三、「(解題)三国遺事五卷」、『史学雑誌』第11編第9号、史学会、1900
 年9月、63-65頁。

63) 「神号々仏語ヲ用ヒ或ハ仏像ヲ神体ト為シ鰐口梵鐘等装置セシ神社改正処
 分・三条」、『太政類典・第一編・慶応三年~明治四年・第二百二十二卷・教法・神
 社一』、国立公文書館デジタルアーカイブ、<https://www.digital.archives.go.jp/file/1363215>、2021年3月20日アクセス。国立公文書館には「神名に仏教的
 な用語を用いている神社の書上げ、仏像を神体としている神社は仏像を取
 り払うこと、本地仏、鰐口、梵鐘の取外しなどを命じました」とある。

64) 「鎮祭詔并宣布大教詔宣命附宣教心得」、『太政類典・第一編・慶応三年~明治
 四年・第二百二十一卷・教法・教法』、国立公文書館デジタルアーカイブ、<https://www.digital.archives.go.jp/file/1345768>、2021年3月20日アクセス。国立公

なおこの文科大学史誌叢書版『三国遺事』については、後述する今西竜が「此刊本、訂正を要すべき点甚だ多し。坪井先生の手許には訂正再板の稿既に成るものあるも、未だ改板に至らず、日本続大藏經には大学刊本の句読の誤十数个所を坪井先生が訂正せられしものを収めたり、本書の良品は改正板の出づるを待つの外なし」と批判した⁶⁵⁾。坪井自身も「実に無責任を極めたる版本にて其の甚しきこと暴利を貪るを目的とする書林が一夜漬にして出す翻刻物と毫も扱ふ所あらず」⁶⁶⁾と憤りを露わにしている。

7. 三浦周行, 「朝鮮の開國傳説」, 『歴史と地理』第1巻第5號, 星野書店, 1918(大正7)年3月.

「朝鮮が北方支那の移民の間に発生した箕子伝説を採用して其事大心を表現させつゝも、尚ほその間自ら抑へ難き独立自尊心の閃きと共に、宗主国に対する軽き反抗心を起して之を満たさんが為に、こゝに檀君伝説の生れた経路を認めることが出来る。檀君を以て殊更に唐堯と同じ時代の神人とし、又自ら朝鮮と号したとする中にも見え透いた作為と包みきれぬ誇りとが窺はれる…遙に蒼古な我神話伝説に結びつけて牽強附会の説を弄せんとするなどは沙汰の限である、私は斯る意味からも朝鮮歴史の改造を高調したい」(資料集63-64頁).

三浦周行(1871-1931)は明治4年に生まれ、昭和6年に亡くなった。『史林』⁶⁷⁾によると、幼い頃から穎悟で読書家であり、1878年島根県松江師

文書館には「大教宣布の詔が発せられ、神道に基づく国民教化政策の推進が宣言されました」とある。

65) 今西竜, 「朝鮮史の棗」, 『朝鮮史の棗』, 近沢書店, 1935年.

66) 前掲, 坪井, 1900年, 72頁.

67) 「本会評議員三浦周行博士訃」, 『史林』第16巻第4号, 史学研究会(京都帝国大学文学部内), 1931年10月.

範学校付属小学校(1883年修業), 1883年島根県尋常中学校(1888年修業), 1888年私立東京英和学校(1890年修業), 1890年東京帝国大学文科大学撰科(1893年国史科修業), 1892年東京帝国大学史料編纂助員, 1900年史料編纂員, 1902年東京帝国大学法科大学授業嘱託, 1903年東京帝国大学文科大学講師, 1905年史料編纂官(1907年依願退職), 1907年京都帝国大学文科大学国史学講師, 東京大学史料編纂補助, 1909年京都帝国大学文科大学教授国史学第二講座担任, 1915年朝鮮半島史編纂事務(朝鮮総督府)⁶⁸⁾, 1930年京都帝国大学名誉教授などを歴任した。1909年に文学博士を授与されている⁶⁹⁾。

三浦が檀君の年齢を「千九百八歳」としていることから、『三国遺事』をテキストにしたことがわかる。京都帝国大学文学部叢書版『三国遺事』は1921年刊行であることから、東京帝国大学文科大学叢書版を使用した可能性が高い。

三浦の場合、檀君神話の成立過程において「民族自決」的意志が働いたと考えた点が、白鳥や那珂の檀君理解とは異なっている。しかし「朝鮮が北方支那の移民の間に発生した箕子伝説を採用して其事大心を表現させつゝも、尚ほその間自ら抑へ難き独立自尊心の閃きと共に、宗主国に対する軽き反抗心を起して之を満たさんが為に、こゝに檀君伝説の生れた経路を認めることが出来る」と判断するには、あまりにも仮

68) 『朝鮮史編修会事業概要』(朝鮮総督府朝鮮史編修会, 1938年, 4-7頁)によると、朝鮮半島史編纂事業は1916年1月から1918年12月を期限に、上古三韓・三国・統一新羅・朝鮮の四編は脱稿したが、高麗・朝鮮最近世史はできないまま、1922年12月の朝鮮史編纂委員会発足とともに中止となった。三浦のほか、京都帝国大学講師だった今西竜と東京帝国大学助教授の黒板勝美が編纂を嘱託された。

69) 『官報』1909年10月21日。「論文ヲ提出シテ学位ヲ請求シ東京帝国大学文科大学教授会ニ於テ其大学院ニ入り定規ノ試験ヲ経タル者ト同等以上ノ学力アリト認メタリ」とあり第一論文「親子関係ヲ中心トシテノ本邦家族制度」、第二論文「戦国時代ニ於ケル各般制度ノ発達」である。

定や推測が多いのではないだろうか。よしんば『三国遺事』において「民族自決」的意志を読み取るとするならば、作者である一然が生きた時代背景を知る史料は十分にあるはずだが、あえてそれには触れなかった意図が、三浦が言うところの「朝鮮歴史の改造」にみえる。この論文において三浦が最も強調したかった点は、「朝鮮歴史の改造」にあるといえるだろう。すなわち「朝鮮歴史の改造」とは、朝鮮半島史編纂を起点に、朝鮮史編纂委員会、朝鮮史編修会へと続いた朝鮮総督府による『朝鮮史』編纂事業における最大の目的に他ならなかった。

なお檀君を唐堯と同時代の神人とし、朝鮮と号したとしたのは一然だが、三浦が言う「蒼古な我神話伝説に結びつけて牽強付会の説を弄せん」としたのは、専ら江戸時代から明治期の国学者ら⁷⁰⁾であり、批判すべき対象は身内である。

8. 高橋亨、「檀君傳説に就きて」『同源』第1號，同源社， 1920年2月(韓譯版同じ)。

「檀君を以て或は帝積の孫となし、或は朱蒙となし、或は夫妻の父となすは、何れも後世の添加せる粉飾にして、本伝説の原形は単に北朝鮮最初の君長に檀君なる者あり、妙香山に降りて神徳を以て民を治めたりと云ふに過ぎざるなり、果して然らば檀君は北朝鮮の伝説の祖王なれども、南朝鮮とは何らの関係なし、南朝鮮人は宜しく新羅の始祖赫居世を以て祖王となして崇拜し祠祭すべきものなり、檀君教に於て檀君を以て全朝鮮民族の始祖と立つるは、尚史上其証拠を発見する能はざる所に属するなり」(資料集75頁)。

70) 桜沢亜伊、「日本人の檀君論」(『東アジア—歴史と文化—』第20号，新潟大学東アジア学会，2011年3月)及び拙論、「記紀による「一国一神話化」と檀君伝説」(『北方人文研究』第12号，北海道大学大学院文学研究科北方研究教育センター，2019年3月)において、日本人の檀君＝スサノオ説について詳説している。

高橋亨(1878-1967)は明治11年に生まれ、昭和42年に亡くなった。「高橋亨先生年譜略」⁷¹⁾によると、1893年新潟県立尋常中学校編入(1895年卒業)、1895年第四高等学校入学(1898年漢文科卒業)、1898年東京帝国大学文科大学入学(1900年漢文科卒業)、1900年九州日報主筆を経て、1903年韓国政府の招聘を受け官立中学校傭教師(幣原坦後任)、1910年朝鮮総督府宗教調査嘱託、1911年朝鮮図書調査嘱託、京城高等普通学校教諭、1916年大邱高等普通学校校長を務めた。1921年には朝鮮総督府視学官として1年半欧米各国へ出張(1922年帰国)、1923年京城帝国大学創立委員会幹事、1926年京城帝国大学教授(法文学部朝鮮語学文学第一講座担当)、1939年退官、1940年京城私立恵化専門学校長、京城帝国大学名誉教授となるが、1941年山口県へ隠退する。1944年京城経学院提学兼明倫鍊成所長及び朝鮮儒道連合会副会長の職を受諾し、1945年再渡韓するも、終戦によって引揚げてからは、1949年福岡商科大学教授、1950年天理大学教授、朝鮮学会創立し副会長、1956年天理大学おやさと研究所主任を務め、1964年退職、天理大学名誉教授となった。1919年に文学博士を授与⁷²⁾、1940年第1回朝鮮文化功労章授与された。

テキストは東京帝國大學文科大学叢書版『三國遺事』に加えて、『仏國寺事蹟』⁷³⁾を使用しているほか、檀君記事のある史料をいくつか取り上げている。

高橋は時代を追いながら檀君がどのように伝えられてきたかに言及

71) 「高橋亨先生年譜略」、『高橋亨朝鮮儒学論集』、知泉書館、2011年、431-438頁(初出：『朝鮮学報』第48輯、朝鮮学会、1968年7月)。

72) 『官報』1920年2月17日。「論文ヲ提出シテ学位ヲ請求シ東京帝国大学文学部教授会ニ於テ其大学院ニ入り定規ノ試験ヲ経タル者ト同等以上ノ学力アリト認メタリ」とあり、学位請求論文は「朝鮮の教化と教政」である。

73) 奥書に「慶歴六年丙戌二月日国尊曹溪宗円鏡冲照大禅師一然撰」と書かれているが、慶歴(曆)六年は1046年であることから、一然の生没年1206-1289年とは辻褄が合わない。正式名称は『新羅国東吐含山華嚴宗仏国寺事蹟』。日本では黒板勝美の遺品として東洋文庫にある。

し、「伝説が益々発展するに従て益々小説的色彩に濃厚」となったのは、「後世の添加せる粉飾」だとした。そのうえで檀君伝説の原形は北朝鮮のものであって、南朝鮮は新羅の始祖赫居世を祖王とすべきであり、檀君を全朝鮮民族の始祖とするには史料が必要との見解を示している。檀君を帝釈天の孫にするという発想は、仏教伝来後の脚色であって、檀君伝説が発生したと考えられている古朝鮮においてはありえないとする高橋の説は明解である。またこれまで見てきた研究者と比べると、はるかに露骨な否定がない。しかし檀君は北朝鮮固有のものであり、南朝鮮の始祖は新羅の赫居世だと、南北を分断して建国神話を規定するには、高橋自身も古朝鮮やそれ以前の地理や人口往来、経済活動などを明らかにする必要があったと考える。

なお「檀君伝説に就きて」が掲載された『同源』については、1920年2月創刊号の巻頭にある「『同源』発行ノ趣旨」⁷⁴⁾が詳しい。

「日本民族ト朝鮮民族トカ同根ニ出テ同種ニ属スルコトハ古典神話並ニ伝説ニ拠リテ略ホ推スヘク又近時地理学歴史学考古学人類学言語学等ノ科学的研究ノ結果幾多ノ事実ヲ発見セルハ人ノ知ル所ナリ然レトモ此問題ニ対シテハ学術上未タ確然タル断定ヲ下スニ至ラス研鑽攻究ノ余地ヲ存スルモノ極メテ多大ナリ加之朝鮮人ノ大多数ハ日鮮兩者カ同源分流ノ民族タルコトヲ知ラサルノミナラス上代ニ於ケル明確ナル日韓關係ノ史実ヲモ否認シテ兩者初ヨリ無關係没交渉ナリト妄信シ甚シキハ公然異民族ト呼フニ至ル何ソ不学無識ノ太タシキヤ是レ吾人カ平日深ク憾ミトスル所ナリ今茲ニ自ラ揆ラス雑誌「同源」ヲ発刊シテ日韓兩族ノ同種同根ナルコトヲ学術的ニ研究スルノ機関トナシ同時ニ此事実ヲ内鮮人ニ周知セシムルノ用ニ供セントス同志ノ士幸ニ吾人ノ微衷ヲ諒シテ此舉ニ賛シ吾人ノ志ヲ成就セシムレハ則チ間接ニ内鮮融和ノ事業ニ貢献スルノ決シ

74) 加藤房蔵、「『同源』発行ノ趣旨」、『同源』、同源社、1920年2月。加藤は当時、京城日報・毎日申報の社長であり、『同源』の発行人だった。巻頭には「『同源』発行の序言」も書いているが、より説明が詳細になっているが、基本的には同内容である。

テ鮮少ナラサルヲ確信スルモノ也」

これによって『同源』が日鮮同祖論を学術的に立証し周知することを目的とする雑誌だったことは明らかであるが、巻頭論文であるにも関わらず、高橋の「檀君伝説に就きて」が日鮮同祖論に与した内容にはなっていない。金広植は「高橋が「日鮮同祖論」イデオロギーに与しなかったことは、彼の朝鮮人論と深く関わっている」⁷⁵⁾と分析している。

9. 平岩佑介、『三国遺事』鮮滿叢書第6巻，自由討究社，1923(大正12)年。

「昔帝釈の庶子に桓雄といふ野心家があつた、勃々たる謀反気抑へがたく、荐りに下界をねらつて居た、夫を見抜いた父神の帝釈は、ある日秘蔵の靈宝、神通無限の三個の天符印を授けて、人界に降ることを許した…熊は大願成就して生を女にかへたが、誰も亭主になりてがない、そこでまた毎日檀樹の下へいつてどうか子を産ませてくれと祈願を籠めた。是を見て居た雄天王は、変な人間根性が出たものか、ある日人間に仮装して遂に熊女と出来合つた。この間に生まれたのが即ち半島の始祖檀君王儉である」と(資料集82-83頁)

『三国遺事』の抄譯であることから、テキストは『三国遺事』である。

平岩については生年月日も含め、殆んど詳細は不明である。わずかに名前を確認できたのは、以下の3点である。「在外本邦学校職員生徒ニ対スル乗車割引券ノ件 自大正十年三月」⁷⁶⁾に保存されている名刺「日露協

75) 金広植、「高橋亨の『朝鮮の物語集』における朝鮮人論に関する研究」、『学校教育学研究論集』第24号、東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科、2011年10月、22頁。

76) 「在外本邦学校職員生徒ニ対スル乗車割引券ノ件 自大正十年三月」、1921年、JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.B12081109600、本邦鉄道関係雑件(B-3-6-8-26)(外務省外交史料館)。

会学校東京事務主任 平岩佑介」から1921年には日露協会学校に勤務していたこと、『皇国史談 日本の亜細亜』77)において筆者内田良平を支援した新聞社、通信社関係者として細井肇らとともに「平岩佑介」の名前が挙げられていること、細井肇が設立した自由討究社の主幹であったこと78)しか、存在を認めることができなかった。

平岩版『三国遺事』の奥書には、平岩が抄訳を担当した経緯について細井肇が以下のように述べている。

三国遺事は非常に難解な書物である。之が訳解は企てゝも及ぶまいと、殆んど断念をして居たのであるが、自由討究社主幹平岩佑介氏が、屢ば予の之を繰返して遺憾とせるを察し、夫れなら自分が其衝に膺つて見やう、併し出来るか出来ぬか分らないから、予告をせずに置いてくれろとの事であった。爾来約一年を経た。自分は殆んど忘れて居たのであるが、平岩氏は其後切々孜々、訳解に力め、此程脱稿して予の手許に送り届けられた。斯る珍書—専門家以外の者のかつて翻訳しやうともしなかつたものが、誰にも分る言文一致で世に公けにされる事は、文献の爲めに少からざる貢献たと思ふ。こゝに平岩氏の労を多謝すると共に読者諸君にも此旨を一言申上げて置く79)

ここからは平岩が自由討究社という出版社に勤務し、朝鮮史あるいは漢文の専門家ではないことがわかる。よってこの『三国遺事』は、誰にでもわかる平易な文体で日本語に翻訳された読み物、いわゆる一般書であって、研究成果ではない。

77) 内田良平、『皇国史談 日本の亜細亜』、黒竜会出版部、1932年、297頁。文中では「平岩佑介」となっているが、恐らく「佑介」の誤植である。

78) パク・サンヒョン、「翻訳から発見された朝鮮(人)—自由討究社の朝鮮古書の翻訳を中心に—」、『日本文化学報』第46輯、2010年8月、391-412頁【韓国語】。

79) 平岩佑介、『三国遺事』鮮満叢書第6巻、自由討究社、1923年、72頁。

10. 小田省吾, 「謂ゆる檀君伝説に就て」, 『文教の朝鮮』
2月号, 朝鮮教育会, 1926(大正15)年2月 / 「檀君伝説」,
『朝鮮小史』, 魯庵記念財団, 1931(昭和6)年

①謂ゆる檀君伝説に就て, 『文教の朝鮮』2月号, 朝鮮教育会, 1926(大正15)年2月.

「この伝説を読む時は、何人と雖も其の内容が仏教に關係のあるものであることは、直ちに知ることが出来るであらう…李栗谷は「檀君の首出文献稽うる無し」…李星湖は「その説、皆信ずべからず、其の桓雄桓因等、荒誕棄つるべし」…安鼎福は「按ずるに東方古記等の書言ふ所の檀君の事皆荒誕不經、……其の称する所の桓因帝釈は法華經に出づ、其の他称する所は皆是れ僧談」と謂ひ、…韓致大淵…尹廷琦等、李朝の学者は各時代を通じて、其の伝説に依つて捏造せられた取るに足らざることを言はないものはない位である。内地の学者の中でも、那珂博士の如き、白鳥博士の如き大家が、いづれも皆伝説より出でたるもので、取るに足らざることを論ぜられて居る…今日猶ほこの伝説が朝鮮人間に比較的強き信仰を以て、知識階級の間にも唱導せられて居るのは何故であるか」(資料集85-86頁).

「李朝が高麗人の民心を得る政策としても、高麗人の信じ来たる檀君を尊崇して棄てなかつたことは、これ亦然るべきこと存するのである。併しながら韓国併合の結果、内鮮一家をなしたる今日に於て此の檀君崇拜を如何に取扱ふべきかは更に一箇の別問題となるのであつて、之は行政方面とも關係のあることであるから本篇に於ては陳述を見合はすこととする」(資料集95頁).

②「檀君伝説」, 『朝鮮小史』, 魯庵記念財団, 1931(昭和6)年.

「なほ朝鮮では、箕子・衛満朝鮮の前に、今から四千年前、即ち支那でいへば堯と同じ時代に、檀君といふ神人が、始めて半島に国を建てて朝鮮といひ、平壤に都したといふ伝説もある。これを檀君朝鮮と称する。この伝説は、今から六百五十年程前、高麗の僧一然の撰つた三国遺事に記録されてあるが、正史には見えて居らぬ。平壤には、箕子祠と並んで檀君祠がある(資料集197頁).

小田省吾(1871-1953)は、明治4年に生まれ、昭和28年に亡くなった。「小田省吾略歴自記」⁸⁰⁾によると、1887年神宮皇学館に入学するが退学し、上京、国民英学会で英語を学び、東京英語学校入学、1891年第一高等学校予科入学(1896年第一高等学校大学予科第一部卒業)、1896年東京帝国大学文科大学史学科入学(1899年卒業)、1899年大学院入学(同年退学)、長野県師範学校教授(1900年退職)、1900年山口県萩中学校教諭心得から教諭、1902年徳島県師範学校校長、1907年奈良県畝傍中学校校長、1908年第一高等学校教授となるが、同年韓国政府学部書記官として赴任する。1910年朝鮮総督府内務部学務局編輯課長(1924年免官)となり、1911年台湾を教育視察した。1913年京城専修学校校長兼事務取扱、1918年中枢院編纂課長事務取扱として嘱託採用、1921年学務局古蹟調査課長と兼務、1922年朝鮮総督府視学官兼事務官、1923年朝鮮帝国大学創設委員会委員、1924年朝鮮帝国大学付属大学予科開校準備に関する事務取扱、京城帝国大学予科教授兼大学予科部長(1927年予科部長免官)となる。1925年朝鮮史編修会委員、1926年釜山府史編纂顧問(1932年完成)、同年京城帝国大学教授として朝鮮史学第二講座担任(1932年依願免官)した。1927年京城府史編纂委員会顧問、1930年李王職実録編纂委員、1932年京城帝国大学法文学部講師(1933年解職)、朝鮮歴史地理学会長、1933年中枢院旧慣及制度調査事務、朝鮮総督府宝物古蹟名勝天然記念物保存会委員を歴任する。『朝鮮史講座』の発行は、1923年から始まり翌1924年の15号で完結した。1945年敗戦に伴い三重県鳥羽市に引き揚げている⁸¹⁾。

使用したテキストは引用などからも明らかだが、二編とも『三國遺事』である。

80) 小田省吾、「小田省吾略歴自記」、『辛未洪景来乱の研究』、小田先生頌寿記念会、1934年、1-10頁。

81) 永島広紀、「日本における近現代日韓関係史研究」、『日韓歴史共同研究報告書』第3分科篇 下巻、日韓歴史共同研究委員会、2005年、204頁。

「謂ゆる檀君伝説に就て」において、小田が伝説を主張する根拠にしたのは、李朝時代の儒学者である李栗谷や李星湖、朝鮮実学派の学者である安鼎福、韓致大淵、尹廷琦による檀君否定である。儒学者らの説を朝鮮社会における社会通念であったととらえた小田は、檀君否定は自明の理だとしたのである。さらに近代歴史学の観点からは、「那珂博士の如き、白鳥博士の如き大家も、「皆伝説より出でたるもので、取るに足らざる」としたと補完した。まさに同調圧力⁸²⁾をかけるかのように、檀君否定が正論であると主張したのである。同調圧力をかけてまで檀君否定をしなければならなかった理由については、文末の「韓国併合の結果、内鮮一家をなしたる今日に於て此の檀君崇拜を如何に取扱ふべきかは更に一箇の別問題となる」という言葉が全てであろう。当時、檀君問題は政治的イシューであり、その問題解決は朝鮮総督府にとっての喫緊の課題だった。だからこそ、小田の主張は強圧的になったといえる。

一方『朝鮮小史』は、小田自身が「最近に於ける學術的研究の成果に基づいて朝鮮史の要領を簡単に説述」したものであり、「専門家に示すべきものではない」と述べているとおり、大衆的な日本人読者を想定し書かれた一般書と考えるべきである⁸³⁾。特筆すべきは、「古朝鮮と四郡」と題した章が「朝鮮半島の古代」、「箕子朝鮮」、「衛滿朝鮮」と續けたあとに、「檀君伝説」が書かれた点である。例え史實ではないとしても、最も古いとされる檀君神話は、殆んどの場合歴史の冒頭で語られ

82) Asch, S. E. : Opinions and social pressure. Scientific American, 193, pp.31-35, 1951. 「同調圧力とは、周囲の人々が設定する標準ないし期待に添って行動するように作用する圧力のことを言う。同調には、多数者意見に本心から同意して生じる私的同調と本心とは異なるが表面上多数者意見に従う行動である公的同調がある」(青木俊明・星光平・佐藤 崇「集团的状況における賛否態度の形成：不利益非想起型同調圧力の影響」、『土木計画学研究・講演集』第30回、土木学会、152頁、http://library.jsce.or.jp/jsce/open/00039/200411_no30/pdf/152.pdf、2021年2月10日アクセス。

83) 小田省吾、『朝鮮小史』、魯庵記念財団、1931年、3頁。

てきたが、檀君を正史として取り扱わなかった朝鮮史編修會の方針⁸⁴を、小田は『朝鮮小史』においても反映させたとみるべきだろう。

そもそも小田による激しい檀君否定は、檀君論争のきっかけとなった「謂ゆる檀君伝説に就て」が嚆矢ではなく、1923年に発行を開始した『朝鮮史講座』においてである。ここで小田は舌鋒鋭い批判を展開していた⁸⁵。しかし渡韓以前の1901年に発表した「日本書紀及姓氏録に見えたる呉国」(『史学雑誌』第12編第3, 4号, 1901年3, 4月)⁸⁶という題目からは、史学科出身の小田が当初から朝鮮を研究対象にしていたとは考えづらい。小田の檀君否定論は、あくまで1908年の渡韓が契機となったと考えるべきであろう。

11. 稲葉岩吉(稲葉君山), 「檀君説話」, 『朝鮮史學』第6號, 朝鮮史學攷會, 1926年(大正15)6月.

「崔六堂君の近業に係る東亜日報所載の檀君論は、…わたくしの先年認めた檀君に關した一節もその引合に出されている。わたくしとしては、あの当時の考へを今も訂正する必要は感じてゐないけれども、何程か補足して置きたいと思ふ。…(安鼎福本三国遺事)によれば、朱蒙即ち高句麗の始祖東明王は、檀君の子であるといふことになるのである。三国史記にも何にも見あたらない。…しかしこれは新羅系の全盛時代では受入れらるゝ性質の記事ではないと思ふ。新羅は、…凡て天降姓であつた、檀君の子孫であるとの説話を伝えてゐないのみならず、高句麗即ち扶余系とは、全く別種の選民だといふ信念がたかまつてゐるからである。…新羅系の天降姓と檀君説話を調和することは、かなり艱難でなければならぬが、それにもまして問題視すべきは、これまでの鮮内の巨室名門のすべては、その祖先

84) 前掲, 拙稿, 84頁.

85) 前掲, 拙論, 82頁.

86) 前掲書, 小田省吾「小田省吾著述目録」, 1934年, 2頁.

を支那本部の名族に託してゐる。今の鮮姓中に一として漢姓以外のものを見出さぬのも、その思想の影響であらう。檀君説話は構成されても、民族のおのおのの族譜とこれらとの調和は、さらに至難といはざるを得ない。日本にては土姓と客姓との別ありしこと、鮮内と同一であつたが、土姓は客姓を従属たらしめた、朝鮮は、これに反してゐる。新羅ですら、支那古代の小昊金天氏説をかついでゐるではないか」(資料集96-97頁)。

稲葉君山こと本名稲葉岩吉(1876-1940)は、明治9年に生まれ、昭和15年に亡くなった。1897年高等商業学校附属外国語学校清語科入学(1900年卒業)⁸⁷⁾し、「予が満鮮史研究過程」⁸⁸⁾によると、1900年に内藤湖南の薫陶を受けて北支へ遊学した。1902年大阪商船会社漢口支店に勤務するが、1904年には退社し、陸軍通訳として日露戦争に従軍する。1906年には内藤湖南とともに鮮満を歴遊した。1908年白鳥庫吉の南満州鉄道株式会社「歴史調査室」において満鮮歴史地理調査事業に参加(1914年事業終結)、1915年参謀本部及び陸軍大学教官、山口高等商業学校講師となる。1919~1922年内藤湖南のもとで『満蒙叢書』の復刻に従事し、1922年朝鮮総督府修史官となり、1937年の解職後は建国大学教授となった。なお1932年には文学博士の学位を授与されている⁸⁹⁾。

テキストは「安鼎福本三國遺事」であることが文中で明らかにされている。

この論考は、小田省吾の「謂ゆる檀君伝説に就て」(『文教の朝鮮』2月号、1926年2月)に対して、崔南善が『東亜日報』において反論した「檀君

87) 市古宙三、「稲葉岩吉博士の逝去」、『史学雑誌』第51編第8号、1940年8月、82頁。

88) 稲葉岩吉、「予が満鮮史研究過程」、『稲葉博士還暦記念満鮮史論叢』、稲葉博士漢暦記念会、1928年、1-28頁。確認のため、前掲、市古宙三及び塚瀬進「戦前、戦後におけるマンチュリア史研究の成果と問題点」(『長野大学紀要』第32巻第3号、2011年3月、254頁)を参照し、不足を補っている。

89) 『官報』1932年7月12日。「京都帝国大学ニ於テ去月二十日附…新潟県稲葉岩吉ニ文学博士…ノ学位ヲ孰モ授与セリ(文部省)」。

否認の妄-『文教の朝鮮』の狂論-」⁹⁰⁾に対し、稲葉が反論したものである。ただし崔南善が実際に名前を挙げて批判したのは、「小田某」、「那珂」、「白鳥」、「今西某」、「三浦某」の5名であって、稲葉の名前はない⁹¹⁾。また稲葉が言う「先年認めた檀君に関した一節」がどの論文に書かれたものなのかを、今回の研究で特定することができなかったが、以下に1926年2月以前に書かれた稲葉の論考における檀君に関する記述を取り上げておく。

- ①「附庸伝説(箕子伝説：引用者注)より解放されて、独立した民族信仰の中心伝説(檀君伝説：引用者注)に驀進しつつある鮮人の今日は、慶賀すべきであるに違いないけれども、伝説は、どこまでも伝説であって歴史では無いということに、理解が無ければならない。伝説には、信仰が多半加味されているから、民族の将来を指示し、その生活を律するには、不足はないとしても、それだけでは、民族成立の由来をすら知ることが出来がたいのみならず、日本国家の一員であるという理解すら持つことが、不可能になる」⁹²⁾。
- ②「いかにしても、三国-高句麗・百濟・新羅の各々が、特色づけていた開国物語を、檀君伝説の下に並べることは出来ない」⁹³⁾。
- ③「(朝鮮史編纂委員会の：引用者による)修史は当面の政治に都合のよい様に、曲筆さるゝに決つてゐやう、従来の日本学者の史筆を見るに、政権や国家のためといつたら、随分思ひきつて曲筆してゐるか

90) 崔南善、「檀君否認の妄-『文教の朝鮮』の狂論-」、『六堂崔南善全集』第2巻、玄岩社、1974年、77-78頁(初出：『東亞日報』1926年2月11日付(上)、2月12日付(下))【韓国語】。

91) 「檀君否認の妄-『文教の朝鮮』の狂論-」における崔南善の反論の要点については、前掲、拙論、83頁を参照して頂きたい。

92) 稲葉岩吉、「朝鮮の文化問題」(三)『東京朝日新聞』1921年12月14日。

93) 稲葉岩吉、「朝鮮民族史」『朝鮮史講座』第2分類史、朝鮮史学会、1923-1924年、32頁。

ら、今回もお多分に漏れまい、つまり簡拔されて委員となつた人々は政権の爪牙となつて、朝鮮史の真相を抹殺するやうなものだ。現に鮮人間には、彼等が大切に護持してゐる檀君(日本の天照大神のやうなもの)すら、為めに脅威を受けてゐると云つてゐるではないかと、斯いふやうな非難を加へるものがある。…朝鮮人の常に護持してゐる檀君についての想像も、全く誤解であり、即断である。檀君崇拜は、輓近著しく発達し、殆んど全鮮の空気を圧してゐるのであるが、私の考へを申すと、檀君の史的価値は内外学者の研究に期待さるべき筈のもので、私ども修史に面した急務と云ふべきではない。私どもの立場からすれば、今日の鮮人が檀君を護持し、崇拜の度を加へてゐるといふことが、既に檀君史の一部を構成してゐる歴史であると思ふ。抹殺などは思ひもよらぬことである。たゞ檀君その人が鮮人の言の如く、唐堯虞舜の間、即ち今より四千二百年前に降生したといふ主張を、歴史が無条件にとり入れてよいか、どうかは、一に委員会の審議に待たざるを得ない」94。

- ④「朝鮮の青年党が、その伝来の附庸伝説であつた箕子崇拜から解放せられて、檀君崇拜てふ民族自決の伝説に進みつゝあること、の消息は、容易に認め得べきものである。従来は、青年方面のみに限られてゐた傾向といつてもよいのであるが、今日となりては、檀君伝説は、全鮮の空気を圧してゐる、乃ち青年はいふに及ばず、老人党までも、敢て箕子伝説を云々するものが、薄らいで来たやうに感ぜられる」95。

先行研究においては、稲葉が檀君神話に対して肯定的だったとする見方がある。その理由については、稲葉の満鮮史観との関係が挙げられている。檀君神話が「朝鮮と「満洲」の密接な関係を主張する上で、根拠となり得るものと考えられた」96とする分析であり、稲葉の満鮮史観に

94) 稲葉岩吉、「朝鮮修史事業に就いて」、『植民』2巻5号、日本植民通信社、1923年5月。

95) 稲葉岩吉、『朝鮮文化史研究』、雄山閣、1925年、129頁。

96) 桜沢亜伊、「「満鮮史観」の再検討－「満鮮歴史地理調査部」と稲葉岩吉を中心として－」、『現代社会文化研究』No.39、新潟大学大学院現代社会文化

とって「檀君は、実に都合のよい存在」⁹⁷⁾だったとする分析である。そのうえで「稲葉が否定的に捉え、「独立騒擾の創痕」として危険視したのは、その檀君伝説を利用して、民族の結束を図ろうとする朝鮮人知識人(その代表が崔南善)の歴史叙述であり、彼らの活動によって「併合の精神が、這般不用意なる歴史改削によりて、曖昧に附せられること」(稲葉岩吉「朝鮮の文化問題」(三)『東京朝日新聞』1921年12月14日：引用者注)にあった」⁹⁸⁾としている。小田が抱いた危機感は、稲葉にとっても同様であった。当時朝鮮総督府が朝鮮独立を阻止するため、何としても檀君を否定しなければならなかった事情が十分にうかがえる。

12. 青柳南冥, 「檀君神話」『朝鮮史話と史蹟』全, 朝鮮研究會,
1927(昭和2)年.

「素盞鳴尊は、…朝鮮王国を開いて、其子五十猛神の御代に、完全なる君主権を有する檀君と為られたのではあるまいか」(資料集101頁).

「内鮮両民族の祖先は、曾て同一の地点に同一の生活を営み、且つ同一の信仰の下に唵喁して居つたことがわかる」(資料集101頁)

「檀君は日本の天降神族と同族であつて、…日韓両地の生民が、同じく天降神族の神話を、朦朧ながら後世に伝説し得たるを悦ばざるを得ない。…現今朝鮮の人々が、檀君神を崇拜することは我祖先諸神の分家の神を崇拜するのであつて、日韓の併合茲に於てか、大に其の意味深宏なるを感ずるのである」(資料集102頁)

青柳南冥, 本名青柳綱太郎(1877-1932)は, 明治10年に生まれ, 昭和

研究科, 2007年7月, 31頁.

97) 滝沢規起, 「稲葉岩吉と『満鮮史』」, 『中華世界と流動する「民族」』千葉大学社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書 第35集, 千葉大学社会文化科学研究科, 2003年3月, 62頁.

98) 同上, 62-63頁.

7年に亡くなった。「韓国近現代人物資料」⁹⁹⁾によると、1899年東京哲学館入学(1901年中退)¹⁰⁰⁾、1901年関門新報の通信員として京城に入り、1903年には大阪毎日新聞の嘱託として南鮮地方の実業調査に従事している。1906年から韓国政府財政顧問部財務官を務め、その後宮内府へ異動するが、1910年韓国併合と同時に退職した。1910年には朝鮮研究会主幹となり、福岡日日新聞通信員兼務を経て、『週刊京城新聞』を発刊、1917年に京城新聞社長となった。

テキストが『三国遺事』と『東国通鑑』であることは文中で明かされているが、それぞれの書き下し文は、青柳自身によるものと思われる。上掲した文章からは、青柳が日鮮同祖論の立場に立っていると思われる。しかし檀君否定が自明の理となっていた植民地朝鮮において、さらに言えば激しい檀君論争の後において、檀君と日本の神話を同一視した主張をした点からも、青柳を研究者と見ることは難しい。歴史的根拠に基づかず、あくまで青柳個人の朝鮮に対する思い入れと、思い違いに基づいているからである。何より青柳自身によって、『朝鮮史話と史蹟』の執筆目的が語られている。序文には、「我輩思へらく、朝鮮の歴史を古文書化せむとするは歴史家の弊である、朝鮮研究なる名に於て、翻々たる字句と、事実の詮議は我輩の採らざる所。我輩は朝鮮歴史乃ち実録事実の記載者に非ずして哲学と政治を混化して、精神的に一見識を出さむとするのが、我輩の理想である」¹⁰¹⁾とあり、研究者とし

99) 「青柳綱太郎」「韓国近現代人物資料」、『韓国紙データベース』HP, http://db.history.go.kr/item/level.do?levelId=im_215_23510, 2021年1月31日アクセス。桜井義之、『朝鮮研究文献誌－明治・大正編－』(竜溪書舎, 1979年, 28-29頁)も参照した。

100) 青柳の学歴について、上掲資料では東京哲学館以前に、出身である佐賀の「含咀学舎卒業」とあるが、当時の佐賀市資料からはその名前の学校の記録が確認できなかったため、掲載しないこととする。

101) 青柳南冥、「檀君神話」、『朝鮮史話と史蹟』全, 朝鮮研究会, 1927年, 序文。

て朝鮮史を執筆したのではないと明言していることから、『朝鮮史話と史蹟』は一般書である。

13. 今西龍, 『朝鮮史概説』, 『朝鮮史の栞』, 近沢書店, 1935
(昭和10)年 / 「檀君考」, 『青邱説叢』1巻, 非売品, 1929年

①『朝鮮史概説』, 『朝鮮史の栞』, 近沢書店, 1935(昭和10)年¹⁰²⁾.

「箕子の尊崇は近年に至りて朝鮮に全く絶え、之に代りて開国の祖として檀君の尊崇起り、檀君教(大宗教)とさへ称する教派出でたり。これ一大事件を語るものなり」(資料集201頁)。

「高麗の中頃に至り僧徒は本地垂跡説を立て、此仙人と仏菩薩との混一を計らんとせしことあり。此仙人の一つに平壤の守護神王儉仙人あり、平壤ママの古名王陰おそらの陰の扁を改めて儉とし、人名の如くせり。高麗の中頃恐くば高宗王頃に此王儉仙人に檀君の尊号を奉り檀君王儉と称し、これを朝鮮開国の神人とし、帝釈の子桓雄が妙香山檀樹の下に降下して生みし子にして、朝鮮を開けりとす。思うに高麗が尊奉せし中華の宋は弱くして、高麗は其北狄視する遼・金が蹴起して皇と称し帝と号し、中原に命令し韃靼東真の起るを見たり。高麗自身に於ても其自己が古き文化と悠久なる歴史を有するを見るときは、此蛮夷より起りし大国に対し、多少の自負心なかるべからず、彼等は自国独特の開国の祖を欲するの情ありしなる可し。高麗を継承せりと自称するもの、高句麗は王儉の地たる平壤に都せり、王儉仙人は開国の神人たりとの伝説、恐くば陰陽道者流(地理讖緯説)によりて構成せられしなる可し。其邪熱を醒す梅檀の尊号を有するは疫病除けの効もありし神なる可し。此檀君のことは三国遺事に載せられしを初めとす。…併し檀君伝は高麗の学者文士に少しも顧みられざりしが、李氏朝鮮に入りて此説を採るものあり、世宗の頃より其尊崇起り尹淮が之を書

102) 「本稿は大正8年8月、京都帝国大学夏期講演会に於て、公命により朝鮮史概説を講演せし際に作成せる稿本なり」と「朝鮮史概説」の末文に書かれていることから、1919年に脱稿したものである。

し、徐居正が東国通鑑外紀に収録せしより、此説は上古よりの伝説の如く見做さるゝに至れり。李氏時代となりて檀君の祭祀も国により行はるるに至れり。檀君は神人として、箕子は王者として尊崇せられしが、事大の精神盛なる時代に於ては、箕子は最も尊崇せられたりしも、近年に至りて朝鮮の自主的精神より檀君の崇拜行はれ、朝鮮人は朝鮮の宗教を奉ぜざるべからずとて、大宗教なるもの出でたり。…箕子伝説といひ檀君伝説といひ、其実は如上のものなり」(資料集202-204頁)。

②「檀君考」、『青邱説叢』1巻、非売品、1929年。

「朝鮮民族は、曾て其民族の祖神を有せしも、其半島に入りて分裂するに及び、此祖神は各国の祖神となりしなるべし。その割拠して相闘争し、長年月を経るに従ひ各国は其祖神を自国の専有として他国の祖神よりも優秀なるものとし、漸次共通祖神たるの性質を失し、加ふるに半島の統一に先ち、外来宗教の勢力熾んなりしと、古伝の失はれざるに先ち記録することなかりしとの為めに、古代神話を失ひ其祖神をも失忘するに至れるものなるべし」(資料集154頁)

「檀君の称号と現存の伝説とは王氏高麗の中期以後に作成せられたるものにして、其主体は古来の地祇なりとするも仏教・道教によりて構成せられしものなり。檀君の称号は道教的称号にして、平壤方面の地祇仙人王儉に附せられしものなり。檀君の系統を古くせんとする厚意を有して調査すれば、仙人王儉は或は楽浪・带方の漢民族の祀れる神に統を引くものかとも思はれるけれども、然らずして半島の北辺に於て僅に祀を絶たざりし高句麗の解慕漱を祭れるものなるべし。もともと平壤地方に於ける一地祇にすぎずして、広く行はれしものにあらざれども、其縁起の構成が民族の自尊を感じたる時の思想に偶々的中せる為め、書籍にも記載さるゝに至り、其説やゝ行はれたがるが、李朝に至り開国の神人として官撰の史籍の巻首に記載さるゝに至り、其説は全半島に流布し、史的な神人として動かすべからざる位置を得るに至れり。然りと雖、檀君は檀君として安置せられしにすぎず、其宗教的信仰が起りたるは現代にあることを論ぜしなり。而して特に注意すべきは檀君は本来、扶余・高句麗・満洲・蒙古等を包括する通古斯族中の扶余の神人にして、今日の朝鮮民族の本体をなす韓種族の神に非ず。彼の父母の一を神とし、他の一を獣類とする伝説は、仏教的装飾や道教的影響に依りては決して生ずるものに非ずして通

古斯民族の祖神に特有なるのものなりとす。檀君の全身者たる仙人王儉を楽浪・帶方漢人の祀神に統を引くものに非ずして、高句麗人の祭りし解慕漱なるべしと推定するの外なきは実に此一点にあり。父母のいづれかを獸類とするは、日韓民族の神には見るべからざるものなり(資料集193-194頁)。

「新羅王国は…其祖神を以て旧新羅人のみの祖神なりとし、之をして韓民族全体の祖神に還元することを知らず。加ふるに仏教の勢力多大にして、信仰上にも異変を生じ、新羅國の滅亡と共に其祖神もまた滅亡せり。韓民族に祖神あることは事実なり。…漢民族の祖神は、韓民族の遠き祖先が祖神となしたるものにあり。而して其名其徳の彷彿として窺ひ知るべきものに新羅の弗矩内あり、任那即ち加羅の夷毗訶あり、弗矩内は漢字訳して赫居世といふ「光を知らず」の義にして、新羅古代の王が奉祀せしものなり」(資料集194頁)。

今西竜(1875-1932)は、明治8年に生まれ、昭和7年に亡くなった。「京城帝国大学教授兼京都帝国大学教授今西竜博士訃」¹⁰³⁾によると、1903年東京帝国大学文科大学史学科卒業、東京帝国大学文科大学大学院朝鮮史専攻入学(1908年7月まで在学)、1908年東京帝国大学文科大学にて副手(1913年依願退職)及び史学事項取調掛勤務に嘱託採用され、1909年燃藜室記述調査補助嘱託、1911年東京帝国大学文科大学列品室教務補助嘱託、1912年に解職される。1913年京都帝国大学文科大学の朝鮮史講師、1916年京都帝国大学助教授となった。同年朝鮮総督府より朝鮮半島史編纂に関する事務嘱託及び朝鮮総督府古蹟調査委員に任命される。1922年朝鮮史研究のため2年間の支那在留命令を受け、その後在留国にイギリスが追加され、1924年に帰国した。1925年に朝鮮史編修会委員、1926年には京城帝国大学教授兼京都帝国大学教授となる。1922年「朝鮮古史の研究」により京都帝国大学から博士学位を授与された。

103) 鴛潤一、「京城帝国大学教授兼京都帝国大学教授今西竜博士訃」、『史林』第17巻第3号、史学研究会(京都大学文学部内)、1932年7月、185-189頁。

「朝鮮史概説」及び「檀君考」のいずれも、テキストは『三国遺事』である。今西は「朝鮮史概説」執筆の動機を、「緒言」において以下のように述べた。

「朝鮮に於て朝鮮人教育に従事する人々我が国の教育者より選抜せられたる人々が書ける朝鮮郷土資料の幾冊かを閲せしことありしに、朝鮮王を朝鮮の皇帝といひ、甚しきは天皇と称し、其他の用語日本の宮廷に關すると同一のものをを用るたるを見て、此人々が朝鮮史を知らざるは許容すべしとするも、果して国史を知れりやを疑へり。我が国の学者・政治家・実業家・官吏にして、朝鮮を知りし者の最も深きものすら、朝鮮の現在の表面を知りしのみ—朝鮮に就て議論するものゝ多くは此現在をも知らざる者多し—その過去を知らざりき、其内臓を知らざりき」¹⁰⁴。

例えば久保天随『朝鮮史』(博文館、1905年)では、第五編を「近代期今帝時代」と題し李朝第26代国王を「今の大韓皇帝と為す」と記述している¹⁰⁵。本論で取り上げた林泰輔も、『近世朝鮮史』(早稲田大学出版部、1906年)において、第十一章の第三節を「今皇帝の即位及び大院君の新政」と題し、高宗を「今皇帝」と称した¹⁰⁶。今西の指摘は、このような記述を指したものと判断できる。さらに言えば、檀君=五十猛神説などもっての外だったのであろうことは想像に難くない。

今西も小田や稲葉同様、朝鮮の知識人たちが檀君を象徴化させて民族の結束を図ろうとする風潮、ここでは大宗教を挙げているが、こうした動きに対し深刻な憂慮があったといえる。そのための檀君批判の形式は、白鳥、那珂の系譜を踏襲し、仏説を主張した。「朝鮮史概説」が1919年に発表されていることを考慮すると、小田が白鳥や那珂を引き合いに出したのは、今西の影響とも考えられる。

104) 今西竜、「朝鮮史概説緒言」、『朝鮮史の葉』、近沢書店、75-76頁。

105) 久保天随、『朝鮮史』、博文館、1905年、232-234頁。

106) 林泰輔、『近世朝鮮史』、早稲田大学出版部、1906年、358-360頁。

「檀君考」は1922年に授与された博士論文「朝鮮古史の研究」の第一編が元になっていることから、1919年の講演原稿であった「朝鮮史概説」と比較すれば、より論文としての完成度は高いといえよう。「朝鮮史概説」では、ただ伝説だから信ずるに足らずとしていたものが、「檀君考」では、檀君神話の起源について歴史的観点から民族と地域の分析を行ったうえで、「檀君は本来、扶余・高句麗・満洲・蒙古等を包括する通古斯族中の扶余の神人にして、今日の朝鮮民族の本体をなす韓種族の神に非ず」と結論づけた。さらに以下のような「朝鮮史概説」では論じていない、より踏み込んだ持論を述べている。

「弗矩内・夷毗訶等は名を異にすれども、実は韓民族の祖神が国を異にして崇奉せられしものにて、本と同一の神なりしなるべし。若し夫れ祖先を崇拜し、民族の根本に遡りて祖神を崇拜せんとならば、前記の神々を顕揚すべし。他に求むべからざるなり。但し東明朱蒙は扶余種の神人なれども、高句麗及び百済の始祖たるものにして、日本にても之を祖先とせし氏族少なからず、又半島国家が久しく之を祀りし事蹟あり、現代朝鮮人にもその遺民の後は少なからざるべきを以て、此神人を此名に於て顕揚するは何人も異議なかるべしと雖、是れ弗矩内・夷毗訶等を顕揚したる後に於て始めて行ふべきものなりとす」¹⁰⁷⁾。

このような今西の持論には、歴史研究にとどまらない提言というべきものが含意されているように思われる。この意見が、植民地朝鮮の支配層に対して啓蒙的な役割を果たしたかどうか、あるいは朝鮮総督府の植民地政策に直接どれほどの影響を与えたのかは不明ではあるが、歴史家がどこまで踏み込んで発言するものなのか、そもそも「歴史家の仕事」とは何かをあらためて考えさせられる。

107) 今西竜, 「檀君考」, 『朝鮮古史の研究』, 近沢書店, 1932年, 127頁。

第2章 日本人の檀君論分析

1. 檀君神話のテキスト

表2 参照テキスト一覧

名前	生年(和暦)	発表年(和暦)	タイトル	参照テキスト
落合直澄	1840(天保11)年	1888(明治21)年	『帝国紀年私案』	東国通鑑
林泰輔	1854(安政1)年	1892(明治25)年	『朝鮮史』	標題音註東国史略 東国通鑑
吉田東伍	1864(元治1)年	1893(明治26)年	『日韓古史断』	東国通鑑
白鳥庫吉	1865(慶応1)年	1894(明治27)年	「檀君考」	三国遺事
			「朝鮮の古伝説考」	
那珂通世	1851(嘉永4)年	1894(明治27)年	「朝鮮古史考」	三国遺事
日下寛	1852(嘉永5)年	1904(明治37)年	『三国遺事』	三国遺事
坪井九馬三	1859(安政6)年			三国遺事
三浦周行	1871(明治4)年	1918(大正7)年	「朝鮮の開国伝説」	三国遺事
高橋亨	1878(明治11)年	1920(大正9)年	「檀君伝説に就きて」	三国遺事 仏国寺事蹟
平岩佑介	不明	1923(大正12)年	『三国遺事』	三国遺事
小田省吾	1871(明治4)年	1926(大正15)年	「謂ゆる檀君伝説に就て」	三国遺事
		1931(昭和6)年	『朝鮮小史』	
稲葉岩吉	1876(明治9)年	1926(大正15)年	「檀君説話」	三国遺事
青柳南冥	1877(明治10)年	1927(昭和2)年	『朝鮮史話と史蹟』	三国遺事 東国通鑑
今西竜	1875(明治8)年	1919(大正8)年	「朝鮮史概説」	三国遺事
		1929(昭和4)年	「檀君考」	

ここではまず、前章で確認を行っている執筆者が利用したテキストについて、表2としてまとめたものを参照して考察する。

落合と吉田が使用した『東国通鑑』は、1667年に徳川光圀の命で刊行されたものである。この和刻版の序文で林鶯峰は、檀君を朝鮮の祖としながらも、素戔嗚尊を三韓の一祖として、日本と朝鮮を同一視するが¹⁰⁸⁾、これによって江戸時代には、檀君＝スサノヲ説が多く見られる

108) 『東国通鑑』巻1, 出雲寺松柏堂, 檀君[国立国会図書館蔵, コマ番号1], 素

ことになった¹⁰⁹⁾。この流れを汲むのが落合だといえる。ただし落合の場合は、神職という職分からも檀君＝スサノヲ説は、身近な存在として理解しやすい説だったであろう。一方の吉田は、江戸時代からの伝統的な檀君＝スサノヲ説を完全に否定した。独学で研究を進めてきたことから独自の観点が確立し、たとえ徳川光圀版『東国通鑑』の序文を見たとしても影響されなかったといえる。

林が『東国通鑑』以外にテキストとして使用したのは柳希齡撰『標題音註東国史略』である。多く現存している朴祥撰『東国史略』を使わなかった理由は不明だが、檀君の年齢表記を考慮すると、「神寿四千十八」としている朴祥撰よりも「一千五百年」としている柳希齡撰の方が「寿千四十八年」とする『東国通鑑』との差異は小さい。

他は全て『三国遺事』をテキストに挙げているが、白鳥と那珂については『三国遺事』の入手方法が不明である。文科大学叢書版『三国遺事』が出版されるのは1904年であり、白鳥と那珂以外は全てそれ以降の発表であることから、1921年の京都帝国大学文学部叢書版あるいは今西が校訂した1928年の朝鮮史学会版を含め、いずれかを使用することが可能だが、白鳥と那珂が発表したのは1894年である。当時の日本に現存した『三国遺事』は尾張徳川家と神田男爵家のみ¹¹⁰⁾であり、どのように入手したのかは、今回解明できなかった。

2. 國學と(官學)アカデミズム史學

次に、前章で確認しているそれぞれの学歴や対象論文発表時の履歴について考察を行う。

淺鳥尊[国立国会図書館蔵、コマ番号6].

109) 前掲, 拙論, 78頁.

110) 前掲書, 今西竜, 1935年, 18頁.

表3 學歴及び対象論文発表時の履歴一覽

名前	発表年(和暦)	最終学歴	対象論文発表時			発表時の職場
			学位	博論	職位	
落合直澄	1888(明治21)年				大教正	神職
林泰輔	1892(明治25)年	東京大学古典講習科漢書課	博士		助教授	山口高等中学校
吉田東伍	1893(明治26)年	小学校中退	博士			
白鳥庫吉	1894(明治27)年	東京帝大史学科	博士		教授	学習院大学
那珂通世	1894(明治27)年	慶応義塾	博士		教授	第一高等中学校・高等師範学校
日下寛	1904(明治37)年	藩校			史料編纂掛	東京帝大文科大学
坪井九馬三		東京帝大政治理財科	博士		教授	東京帝大文科大学長
三浦周行	1918(大正7)年	東京帝国大学国史科	博士	審査	教授	京都帝国大学
高橋亨	1920(大正9)年	東京帝大漢文科	博士	審査	校長	大邱高等普通学校
平岩佑介	1923(大正12)年	不明	不明	不明	主幹	自由討究社
小田省吾	1926(大正15)年	東京帝大史学科			委員	朝鮮史編修会
	1931(昭和6)年					
稲葉岩吉	1926(大正15)年	高商附外国語学校清語科	博士		修史官	朝鮮史編修会
青柳南冥	1927(昭和2)年	東京哲学館中退			社長	京城新聞
今西竜	1919(大正8)年	東京帝大大学院朝鮮史専攻	博士	審査	教授	京都帝国大学 京城帝国大学
	1929(昭和4)年					

韓国において、植民地朝鮮における歴史の歪曲を議論する場合、当事者であった日本人研究者の歴史観は「植民史観」と評される。1960年代に成立した「植民史観」という概念は、研究者の多くが東京帝国大学の出身者であったことから「官学アカデミズム」と結託した実証主義史学に基づく歴史観を指し、侵略を合理化させたものとして、「民族史観」と対立するものとして定義された¹¹¹⁾。今回の資料集では取り上げられていないが、朝鮮史編修会を取り仕切っていた黑板勝美や、その学統に連なる中村栄孝、末松保和、田保橋潔はいずれも東京帝国大学の国

111) 金鐘俊、『植民史学と民族史学の官学アカデミズム』ソミョン出版、2013年、19-60頁、【韓国語】。

史科あるいは国史学科の出身である。

では官学アカデミズムとはどのように定義づけられるだろうか。松沢裕作は、今も東京大学史料編纂所で続けられている史料編纂事業をリードした「三上(参次：引用者注)や、それに続く黒板勝美、辻善之助らによって、史料編纂掛と東京帝国大学文科大学国史科を中心に形成された歴史学の学派」と定義している¹¹²⁾。なお史料編纂掛が設置されたのは1895年のことである。また岡崎勝世は、「京都帝国大学の教官メンバーの帝国大学卒業年次に「アカデミズム実証主義日本史学」の確立なども重ねると、国史、西洋史、東洋史全体について研究者の「再生産」が回転し始めるのは明治 30 年前後の頃ということになる。従って、この明治30 年を、「官学アカデミズム史学」の「成立期」を示す年号とイメージしてよいのではなかろうか。そしてこの時期は、日本にドイツ近代歴史学が定着した時でもあった¹¹³⁾と述べている。明治30年とは1897年となる。さらに広木尚は、1892年の久米邦武筆禍事件がアカデミズム史学のターニングポイントととらえ、「それまでの「積極的」な姿勢を放棄し、「消極的」な「実証主義」に変質した」としたうえで、1899年4月16日の第1回史学会大会において、坪井九馬三がアカデミズム史学の自立化を強調したことは「この時点でのアカデミズム史学の輪郭を

112) 松沢裕作、『重野安繹と久米邦武』、山川出版社、2012年、75頁。

113) 岡崎勝世、「日本における世界史 教育の歴史(I-3)－「文明史型万国史」の時代2.」、『埼玉大学紀要(教養学部)』第52巻第2号、2017年9月、62頁。「アカデミズム実証主義日本史学」については、永原慶二、『20世紀日本の歴史学』(吉川弘文堂、2003年、41頁)から引用した以下の一文を指す。「史料編纂掛の事業が確定したことは、帝国大学を中心とするアカデミズム実証主義日本史学が、重野安繹、久米邦武らの考証史学を継承し、国政の推移を中心とする編年型政治史・外交史を基本とする性格を明確にしたことを意味した。『大日本資料』が、編年型になじみにくい経済・社会・民衆生活などにかかわる史料を一括収載する方式をとったことも、政治史・外交史中心というランケ流歴史観に連なるものといえるであろう」。

アカデミズム史学の側から明示した言説として重要」だと指摘している¹¹⁴⁾。このような先行研究の成果から、官学アカデミズム史学が東京帝国大学の国史科を中心としていること、1890年代に成立し、その時期に体制を確立したことが明らかとなった。

さて表3を見ると、東京帝国大学出身者は林、白鳥、坪井、三浦、高橋、小田、今西と14名中7名いるが、国史科出身者は三浦だけである。しかも林は学内で差別されたとされる古典講習科出身であり、ほかの白鳥、小田、今西は西洋史あるいは東洋史が専門の史学科だが、高橋は漢文科、坪井の理財科とは経済である。

また、それぞれが論考を発表した時点でどこに所属していたかを見ると、坪井と日下しか東京帝国大学にはいない。ただし日下の場合、歴史研究者ではなく漢学者であり、主に校訂作業を行っていた。吉田は当時まだ在野の歴史家であり、落合は神職の最高位大教正にいて、何より国学者として認知されている。落合だけでなく、江戸時代に生まれた林、吉田、白鳥、那珂、日下、坪井らにとって国学は身近な学問だったと考えられ、小学校を中退している吉田はもちろん、師について漢学を学んだ林や、藩校で学んだ那珂や日下も、西洋に起源がある近代歴史学そのものを正式に学んだことがなかった、あるいはそもそも理解すらしていなかった可能性がある。また坪井のところでも触れたとおり、明治政府による神道の国教化政策や、国家神道の徹底などを受け容れやすい資質は、幼少期に出会った国学の体験も影響しているのではないかと考えることができる。

いずれにしても資料集で取り上げた論者のうち、純粋な意味での官学アカデミズム史学の当事者といえるのは、かろうじて坪井しかいないことは明らかである。白鳥は1904年以降、東京帝國大學教授として官學

114) 広木尚、「1890年代のアカデミズム史学—自立化への模索」、『近代日本の歴史オグラフィー』、山川出版社、2015年、85-86頁。

アカデミズム史學の渦中に身を置くが、1914年から7年間、昭和天皇の御用掛として國史の教授を行ったという経歴からは、アカデミズム史學への貢献は考えづらい。このことから、ここで取り上げた14名のうち官學アカデミズム史學といえるのは坪井だけであって、ほかの13名は官學アカデミズムの周縁にいたことが明らかとなった。

最後に、周縁にいた者のうち、歴史研究や大学とは関係がなかった平岩と青柳について言及したい。以下は坂本太郎によるジャーナリズム史学の定義である。

「アカデミズムの史學が、筆禍を恐れて、瑣事の考証に沈潜している間、民間では文明史体の流れをくむジャーナリズムの史學が流行した。民友社に拠った徳富蘇峰・竹越与三郎・山路愛山などの史論がそれである。文明史体が明治啓蒙期にあらわれた封建打破・四民平等の自由民権論者の歴史とすれば、このジャーナリズム史學は、明治の二十年代にふさわしい、藩閥打倒・国権振張の声をかけた新興ブルジョアの史観であったといえよう。これらはいずれも、なまなましい現実からわり出された、生きた史観である。毎日の生活と結びついた歴史である。史論に精彩があり、深く読者を動かすものがあったことは当然である。ただ専門の学者から見れば、史実の認定に過ちがあり、史料の吟味が不確だという非難をまぬかれることはできない」¹¹⁵⁾。

文明史体については、元良勇次郎、家永豊吉『万国史綱』によると、史体には新古二体があり、古体とは叙事史体を指し、王侯将相の政策偉蹟、交戦の勝敗等の状況を精細に叙述するもの、新体とは文明史体を指し、精確に事の実蹟を叙述し、それに加えて評論を下し得失を弁じ、もって原因結果を述べ、そのうえで文物風教を講ずるものだとしている¹¹⁶⁾。『万国史綱』とは、「万国文明史綱」のことだと明言しているとおり¹¹⁷⁾、1880

115) 坂本太郎、『日本の修史と史學』、至文堂、1965年、257-258頁。

116) 元良勇次郎、家永豊吉『万国史綱』上巻、三省堂、1892年、2-3頁(本文)。

年代以降、「文明」(civilization)が歴史叙述において重要な位置づけとなり、文明史観が潮流となった¹¹⁸⁾。坂本がいう「ジャーナリズム史学」とは、文明史観の流れをくんだ生きた史観であり、毎日の生活と結びついた歴史である。雑誌記者である平岩と出版人であった青柳によって、史実の認定に過ちがあり、史料の吟味が不確かだとしても、平易な言葉で面白おかしく綴られた朝鮮史は、まさにジャーナリズム史学に分類されるべきものだといえる。

第3章 日本人の檀君論と植民地支配

ここでは「資料集」で取り上げた檀君論が、実際に植民地朝鮮で与えた影響とはどのようなものだったかについて検討する。拙論で論じたことを抜粋する¹¹⁹⁾。

最も大きな反発をもたらしたものは、小田省吾の「謂ゆる檀君伝説に就て」だったといえるだろう。小田のところでも書いたとおり、崔南善が『東亜日報』で連載した「檀君否認の妄—『文教の朝鮮』の狂論—」で激しく反論した。これにさらに反論したのが、稲葉による「檀君説話」である。マスメディアを舞台に応酬を繰り返した檀君論争は、1928年に崔南善が朝鮮史編修会に加わったことで、論戦の舞台を朝鮮史編修会へと移した。『朝鮮史』への檀君記事を熱願する崔南善に対して、実証主義史学の立場を盾に拒絶した¹²⁰⁾のが黒板勝美¹²¹⁾である。しかし国

117) 同上, 1頁(緒論)。

118) 南塚信吾, 「日本における西洋史学と西欧中心主義の克服—明治期の『万国史』の教訓から」世界史研究所『ニューズレター』第12号, 2007年12月, 3-4頁。

119) 北山祥子, 「建国神話の政治学—檀君神話を中心に」(2020年度博士学位論文)

120) 前掲, 拙論, 84頁。

史においても、実証主義史学では割り切れない問題が存在した。神代史の解釈についてである。黑板は、「神話伝説の中から幾分にも史的現象の認めらるるものがあるなら、其処を国史の出発点とする」¹²²⁾として、国史の出発点を記紀神話とすることを認めていた。事実を絶対視する近代歴史学=純正史学に「史的現象」という曖昧な存在を容認したのである。一方でこれがあくまでも国史に限った強弁であったことは、檀君を「歴史的人物ではなく神話的のもの」、「編年史の中では取扱い難いもの」¹²³⁾と述べたことから明らかであった。

こうした史観を持った黑板が、朝鮮総督だった斎藤実¹²⁴⁾に朝鮮史編修会の修史官として推挙したのが、愛弟子中村栄孝である。中村は檀君神話を『朝鮮史』が正史として掲載しなかったことについて、以下のように述べた。

「檀君説話について、考証学的に考察し、古文献に見えず、また成立の年代の新しい故を以て、荒誕無稽と称して、殆んど抹殺し去るに等しい評価を下すことも、一理はあるにもせよ、この説話の真の意義、重要な発展過程、またはその完成した姿を見得るのは、実に李氏朝鮮時代初期に存するのであり、その点に於いては、これらの条件を推知し得べき文献が、なお幾多存するにも拘らず、殆んど一顧も与へられずして今日に至つたことは、甚だ遺憾とせねばならぬ。…むしろ内容的に史実の反映を見たことは極めて少量で、或は祭祀に、或は祭儀に、また時代の精神と共に、思想的所産をとり入れつゝ、発展し来たのに過ぎないために、没却されて来

121) 黑板勝美(1874-1946)は、歴史学者であり、東京帝国大学教授。

122) 黑板勝美、『国史の研究』各説の部、文会堂書店、1918年、3頁。

123) 朝鮮総督府朝鮮史編修会、『朝鮮史編修会事業概要』朝鮮総督府朝鮮史編修会、1938年、67-68頁(『韓国併合史研究資料』85、竜溪書舎、2011年所載)。

124) 中村栄孝、「朝鮮史と私」(国史学界の今昔⑫)『日本歴史』第400号、1981年9月、48頁。中村栄孝、『朝鮮—風土・民族・伝統—』(吉川弘文館、1971年)の「序」には、大学の恩師である黑板勝美の推挙で朝鮮史編修会に入ったとある。中村の赴任について、黑板が斎藤実へ宛てた礼状は「斎藤実関係文書」(国会図書館憲政資料室所蔵)にて確認した。

たといふやうな観がありはせぬだらうか。従つて檀君説話の発展については、なほ歴史的考究が遺されてゐるのではなからうか」125)。

中村は史実ではないことを理由に抹殺することも可能だったと前置きしたうえで、檀君神話の由来や経緯、時代背景の歴史的価値は認め、今後の研究の方向性と必要性を提言した点も、朝鮮史編修会での黑板の発言を踏襲したといえる126)。注目すべき点は、「史実の反映」である。中村は檀君神話が、「史実の反映」が極めて少ないとしたが、黑板は記紀神話について、いくらかでも史的現象が認められるならそこを国史の出発点とするとしていた。繰り返しになるが、恩師は国史に対して神話における史実とは言い切れない「史的現象」を許し、愛弟子は檀君神話に「史的現象」を見出さず「史実の反映」を求めた。ここでの「史実の反映」と「史的現象」は同じと考えていい。植民地朝鮮では、このような機会主義的ともいえる解釈で檀君神話が排除されたのである。

広木尚は、黑板を「1910年代から30年代にかけてのアカデミズム史学を主導した歴史学者である」127)とした。しかし植民地期朝鮮において、一官僚として朝鮮総督府に奉職した中村は、恩師のアカデミズム史学を踏襲したのではなく、曖昧な神話の解釈を盲目的に踏襲したように思われる。

-
- 125) 中村栄孝、「檀君朝鮮と李氏朝鮮」、『朝鮮及満洲』301号、1932年12月号、57頁。同じタイトルのものが戦後出版された『朝鮮—風土・民族・伝統—』(吉川弘文館、1971年)に収められている。旧漢字、旧かなを改め、言葉についても若干手を入れているため、本稿では初出のものから引用した。
- 126) 前掲書、朝鮮総督府朝鮮史編修会、67-68頁。黑板は崔南善に対して「檀君・箕子は歴史的人物ではなく神話的のもので、思想的・信仰的に発展したのであるから思想信仰方面から別に研究すべきもの」と発言している。
- 127) 広木尚、「日本近代史学史研究の現状と黑板勝美の位置」、『立教大学日本学研究所年報』第14/15巻、2016年8月、28頁。

おわりに

第1章では、「資料集」に掲載された16編の檀君論と14名のその論者について、履歴の調査を行い分析した。個々の檀君論を考察するに当たっては、植民地期朝鮮における日本人研究者による歴史操作の問題を考えないわけにはいかないが、「資料集」で取り上げられた14名の論者は、想定外に(官学)アカデミズム史学との接近がなかった。注目すべき点は、基礎に国学教育を受けた者が多かったことである。東京帝国大学出身者が少なかったこと、よって近代歴史学の薫陶をリースから直接受けたのは白鳥しかいなかったことも、意外な結果だった。植民地期の歴史学を指す「植民史観」は、(官学)アカデミズム史学と直接的に結び付けられることが多いが、少なくとも今回の対象者に関していえば、彼らの「植民史観」が(官学)アカデミズム史学に基盤を置いていたとは言い難い。「植民史観」の実体については、さらなる検討が必要と思われる。特筆すべきは、それぞれの檀君論の思想的背景に、当時の日本の状況が少なからず影響していることが明らかになった点である。明治初期には徳川光圀版『三国遺事』の影響により、記紀と檀君の関係性に対する言及が多く見られた。その後の檀君神話における仏教的影響に対する過剰な忌避感の背景には、明治政府による神仏分離と、それに伴う過激な廃仏毀釈を考慮しないわけにはいかないだろう。また林泰輔が作成した「太古紀年表」は、以降の檀君論に影響を与え、特に朝鮮総督府における檀君神話の扱いに決定な影響を与えたのではないかと考えた。日本の「本邦記事」が、「上世謂はゆる神代の際辺焉考ふへからず」となっているのに対して、「諸韓朝鮮紀年」には、「檀君開国」とあり、林が「真に然るや否や」と書いているにしても、この点が植民地朝鮮において日本が万世一系の天皇制を進めるうえで大きな障害となることを示唆したように思われる。

第2章では、第1章で行った個々の調査分析をもとに、各人がそれぞれの檀君論で使用したテキストと14名の論者の歴史観を明らかにした。韓国で多く指摘される(官学)アカデミズム史学との関連性をほとんど見つけられなかった点が意外であった。対象者をもう少し広げれば、例えば第3章で取り上げた黒板勝美を加えると、(官学)アカデミズム史学との関連を議論できるが、今回対象となった14名は、東京帝国大学文科大学国史科との接点がほぼなかった。東京帝国大学出身者は7名いるが、(官学)アカデミズム史学を担ったとされる国史科出身者は三浦周行1名であり、その檀君論執筆時に東京帝国大学に所属していたのは、坪井九馬三しかない。

「植民史観」というフレームにおいて、(官学)アカデミズム史学や純正史学、応用史学がシノニムとなっていることに違和感があったが、もう少し「植民史観」の概念を整理するの必要を感じた。管見ではあるが、近代における日本人の朝鮮史研究、特に檀君神話をめぐる研究のほとんどが、アカデミズム史学とは言い難いのではないと思われる。特にジャーナリズム史学に分類した平岩や青柳の歴史叙述は、「歴史物語」にすぎない。

しかし前述したとおり、黒板はまさにアカデミズム史学を体現していたといえる。黒板の意思を再現した中村栄孝をアカデミズム史学とは言い難いが、黒板のサテライトとしての役割は十分に果たした。中村は『朝鮮史』の完成後、朝鮮史を地方史として取り込んだ朝鮮総督府版『国史』教科書改訂を行っている。今回触れることができなかったが、1932年5月に急逝した今西竜に代わり、『朝鮮史』第1編第1巻の執筆を担当したのは、東京帝国大学文科大学国史学科を卒業した末松保和だった¹²⁸⁾。しかし刊行後に、檀君記事に関する論考を発表したのは中村栄孝であ

128) 前掲書、朝鮮総督府朝鮮史編修会、110頁。

る129)．今西の遺志を継ぎ『朝鮮史』を完成させた末松は、『朝鮮史』以降、檀君に関する論考をほとんど発表していない．唯一、日本人向け一般雑誌である『朝鮮行政』に約2年間22回にわたって連載した「朝鮮史」のみである．この中で末松は、檀君朝鮮について以下のように記した、

「普通に箕子、衛滿の二朝鮮を合して古朝鮮といふ．ところが、古朝鮮の中には、今一つ数へあげねばならぬものがある．王儉朝鮮これである．王儉は詳しくは檀君王儉といふから、檀君挑戦とも呼ばれてゐる．箕子・衛滿の朝鮮が支那古典籍にあらはれるものであるに対して、この王儉朝鮮は王氏高麗時代後期の文献に始めて見えるものであつて、前二者とは成立の過程を異にし、同日に談すべきではなく、高麗人自身によつて構成されたものといふ点に意義がある．この古朝鮮＝王儉朝鮮は、年代上では、支那の堯帝と時を同じくする王儉が開国したものであり王儉は御国一千五百年周の武王が箕子を朝鮮に封ずるに及んで退き隠れたとするから、箕子以前即ち最古の古朝鮮となるわけである」¹³⁰⁾とし、さらに続けて「古朝鮮の第一は檀君王儉朝鮮であり、第二は箕子朝鮮であり、第三は衛滿朝鮮…その第一の檀君王儉朝鮮は、王氏高麗時代後期の文献に始めて見えるものであつて、文献上の古さは、到底箕子・衛滿の両朝鮮と比較すべくもない…檀君朝鮮が、文献上かくも新しきものでありながら、なほかつ私が、古朝鮮の第一に掲げねばならなかつたのは何故であるかといふに、一には、それについて文献の語る年代そのものが、箕・衛二朝鮮の前に置かれてゐるからであり、二には、その伝へ(檀君朝鮮)の思想的規模が、半島開闢の伝説としては、最も廣大だからである．かくの如き古さと規模とを有する開闢伝説は、いふまでもなく王氏高麗の「時代の所産」であつて、その後それに加ふるもの出来なかつたのは、かくの如き開闢伝説を不充分とするやうな大きな時代が来なかつたからに外ならぬ．またその前に、かくの如き伝説が生まれなかつたのは、かかる伝説を必要とする時代がなかつたからである．即ち王氏高麗時代に先行した新羅の一統時代には、三国の一たる古新羅の、開闢開国の伝説を奉じて満足し、また三国時代には、新羅をはじめ、高句麗・百濟、それぞれに開闢伝説を持つて居たが、何れもかの箕・衛

129) 前掲、中村栄孝.

130) 末松保和、「朝鮮史」(一)『朝鮮行政』、帝国地方行政学会、1937年9月、3-4頁、ここでは「檀君」と表記している.

両朝鮮より古く時代を指示するものがなかつた。このことは重要な意義を持つてゐる」¹³¹⁾。

末松も中村同様黑板の弟子であり、その勧めで朝鮮史編修会に加わっていたが、認めるには史料が足りないが、否定するにも史料が足りない、否定する史料が足りない以上、「神話伝説の中から幾分にも史的現象の認めらるるものがあるなら、其処を国史の出発点とする」とした恩師黑板の史観を朝鮮史において踏襲し、疑問も含め檀君朝鮮を朝鮮史に加えている。

以上の考察からは、江戸末期から明治期にかけて俄かに形成された日本人としての国民意識(=ナショナル・アイデンティティ)が、隣国の、過ぎては被植民地とした朝鮮の建国神話に対して、過剰ともいえる批判的研究を助長させていったと考えることができる。

今回研究に先立ち、「資料集」を熟読し、それぞれの論考の内容については、「日本人として」というバイアスがないよう論じることを心掛けたが、「日本人として」考え込まざるを得ない点も多々あり、歴史研究の難しさを痛感した。

논문투고일 : 2021. 09. 28 심사완료일 : 2021. 10. 29 게재확정일 : 2021. 11. 15

131) 末松保和, 「朝鮮史」(二) 『朝鮮行政』, 帝国地方行政学会, 1937年10月, 9-10頁. ここでは「檀君」と表記している.

參考文獻

日本語文獻

- 青木俊明・星光平・佐藤 崇, 「集团的状況における賛否態度の形成: 不利益非想起型同調圧力の影響」, 『土木計画学研究・講演集CD-ROM』 vol.30, 土木学会, 2004年11月.
- 青柳綱太郎, 『原文和訳対照三国遺事全』, 朝鮮研究会, 1915年.
- 青柳南冥, 「檀君神話」, 『朝鮮史話と史蹟』全, 朝鮮研究会, 1927年.
- 秋野村夫, 『名士立伝』, 元文社, 1916年.
- 磯ヶ谷紫江, 『墓碑史蹟研究』 第5巻, 後苑荘, 1927年.
- 市古宙三, 「稲葉岩吉博士の逝去」, 『史学雑誌』 第51編第8号, 1940年8月.
- 市古宙三・塚瀬進, 「戦前, 戦後におけるマンチュリア史研究の成果と問題点」, 『長野大学紀要』 第32巻第3号, 2011年3月.
- 稲葉岩吉, 「朝鮮の文化問題」(三)『東京朝日新聞』 1921年12月14日.
- _____, 「朝鮮民族史」, 『朝鮮史講座』 第2分類史, 朝鮮史学会, 1923-1924年.
- _____, 「朝鮮修史事業に就いて」, 『植民』 2巻5号, 日本植民通信社, 1923年5月.
- _____, 『朝鮮文化史研究』, 雄山閣, 1925年.
- _____, 『稲葉博士還暦記念満鮮史論叢』, 稲葉博士漢暦記念会, 1928年.
- 今西竜, 「檀君考」, 『朝鮮古史の研究』, 近沢書店, 1932年.
- _____, 『朝鮮史の栞』, 近沢書店, 1935年.
- 内田良平, 『皇国史談 日本の亜細亜』, 黒竜会出版部, 1932年.
- 岡崎勝世, 「日本における世界史 教育の歴史(I -3)- 「文明史型万国史」の時代 2」, 『埼玉大学紀要(教養学部)』 第52巻第2号, 2017年9月.
- 鴛潤一, 「京城帝国大学教授兼京都帝国大学教授今西竜博士訃」, 『史林』 第17巻第3号, 史学研究会 (京都大学文学部内), 1932年7月.
- 小田省吾, 『朝鮮小史』, 魯庵記念財団, 1931年.
- _____, 『辛未洪景来乱の研究』, 小田先生頌寿記念会, 1934年.
- 落合直澄, 『帝国紀年私案』飯島誠, 1888年.
- 加藤房蔵, 『「同源」発行ノ趣旨』, 『同源』, 同源社, 1920年2月.

- 川原秀城・金光来編訳、『高橋亨朝鮮儒学論集』, 知泉書館, 2011年(初出:「高橋亨先生年譜略」,『朝鮮学報』第48輯, 朝鮮学会, 1968年7月).
- 木戸偉太郎,『常総名家伝』第1巻, 会始書館, 1890年.
- 金広植,「高橋亨の『朝鮮の物語集』における朝鮮人論に関する研究」,『学校教育学研究論集』第24号, 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科, 2011年10月.
- 権純哲,「林泰輔の『朝鮮史』研究の内容と意義」,『埼玉大学紀要(教養学部)』第45巻第2号, 埼玉大学教養学部, 2009年9月.
- 日下寛子栗,『鹿友荘文集』巻1, 野田文之助, 1924年.
- 久保天随,『朝鮮史』, 博文館, 1905年.
- 黑板勝美,『国史の研究』各説の部, 文会堂書店, 1918年.
- 光風館編輯所,『新撰漢文読本教授参考』巻1, 光風館書店, 1929年.
- 故那珂博士功績紀年会,『那珂通世遺書』, 大日本図書, 1915年.
- 坂本太郎,『日本の修史と史学』, 至文堂, 1965年.
- 桜井義之,『朝鮮研究文献誌-明治・大正編-』, 竜溪書舎, 1979年.
- 桜沢亜伊,『『東国史略』の諸本について』,『資料学研究』3号, 新潟大学大学院現代社会文化研究科プロジェクト「大域的文化システムの再構成に関する資料学的研究」, 2006年3月.
- _____,「『満鮮史観』の再検討-『満鮮歴史地理調査部』と稲葉岩吉を中心として-」,『現代社会文化研究』No.39, 新潟大学大学院現代社会文化研究科, 2007年7月.
- _____,「日本人の檀君論」,『東アジア-歴史と文化-』第20号, 新潟大学東アジア学会, 2011年3月.
- 史学研究会,「本会評議員三浦周行博士訃」,『史林』第16巻第4号, 史学研究会(京都帝国大学文学部内), 1931年10月.
- 滝沢規起,「稲葉岩吉と『満鮮史』」,『中華世界と流動する「民族」』千葉大学社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書第35集, 千葉大学社会文化科学研究科, 2003年3月.
- 白鳥庫吉,「檀君考」,『白鳥庫吉全集』第3巻, 岩波書店, 1970年(初出:『学習院輔仁会雑誌』第28号, 1894年1月).

- _____, 「朝鮮の古伝説考」, 『白鳥庫吉全集』第3卷, 岩波書店, 1970年(初出: 『史学雑誌』第5編第12号, 史学会, 1894年12月).
- _____, 『昭和天皇の教科書 国史』, 勉誠出版, 2015年.
- 末松保和, 「朝鮮史」, 『朝鮮行政』, 帝国地方行政学会, 1937年9月-1939年10月.
- 大日本青年教育会編, 『世界名士立伝』, 大日本青年教育会, 1917年.
- 大日本青年教養団, 『東西名士立志伝: 独力奮闘』, 朝日書房, 1926年.
- 高橋源一郎, 『故文学博士吉田東伍先生略伝』, 非売品, 1919年.
- 田部備山, 『現代名士伝: 立志修養』, 修文館, 1912年.
- 田村浩, 『少年のために: 立身成功の基』, 三友堂書店, 1913年.
- 朝鮮総督府朝鮮史編修会, 『朝鮮史編修会事業概要』朝鮮総督府朝鮮史編修会, 1938年(『韓国併合史研究資料』85, 竜溪書舎, 2011年所載).
- 津田左右吉, 「白鳥博士小伝」, 『津田左右吉全集』第24卷, 岩波書店, 1965年.
- 坪井九馬三, 「三国遺事」, 『史学雑誌』第11編第9号, 史学会, 1900年9月.
- 〔(解題)三国遺事五卷〕, 『史学雑誌』第11編第9号, 史学会, 1900年9月.
- 永島広紀, 「日本における近現代日韓関係史研究」, 『日韓歴史共同研究報告書』第3分科篇 下卷, 日韓歴史共同研究委員会, 2005年.
- 永原慶二, 『20世紀日本の歴史学』, 吉川弘文堂, 2003年.
- 那珂通世, 「朝鮮古史考」, 『史学雑誌』第5編第4号, 史学会, 1894年4月.
- 中村栄孝, 「檀君朝鮮と李氏朝鮮」, 『朝鮮及満洲』301号, 朝鮮及満洲社, 1932年12月.
- _____, 『朝鮮-風土・民族・伝統-』, 吉川弘文館, 1971年.
- _____, 「朝鮮史と私」(国史学界の今昔⑫)『日本歴史』第400号, 1981年9月.
- 花房吉太郎, 山本源太編『日本博士全伝』, 博文館, 1892年.
- 林泰輔, 『近世朝鮮史』, 早稲田大学出版部, 1906年.
- 『支那上代之研究』, 光風館書店, 1927年.
- 平岩佑介, 『三国遺事』鮮満叢書第6卷, 自由討究社, 1923年.
- 広木尚, 「1890年代のアカデミズム史学-自立化への模索」, 『近代日本のヒストリオグラフィー』, 山川出版社, 2015年.
- _____, 「日本近代史学史研究の現状と黒板勝美の位置」, 『立教大学日本学研究所年報』第14/15卷, 2016年8月.

町泉寿郎, 「幕末明治期における学術・教学の形成と漢学」, 『日本漢文学研究』
11号, 二松学舎大学東アジア学術総合研究所日本漢文教育研究推進室,
2016年3月.

松沢裕作, 『重野安繹と久米邦武』, 山川出版社, 2012年.

南塚信吾, 「日本における西洋史学と西欧中心主義の克服—明治期の『万国史』
の教訓から」, 『ニューズレター』第12号, 世界史研究所, 2007年12月.

元良勇次郎, 家永豊吉, 『万国史綱』上卷, 三省堂, 1892年.

吉田鋭雄・稲束猛, 『池田人物史』上, 太陽日報社, 1923年.

吉田東伍, 『日韓古史断』, 富山房書店, 1893年.

国立国会図書館所蔵資料

『官報』.

「斎藤実関係文書」.

『東国通鑑』卷1, 出雲寺松柏堂, 1883年.

朝鮮古書刊行会, 「三国史記卷第一」, 『朝鮮群書大系』第1輯, 1909年.

東洋文庫所蔵

国尊曹溪宗円鏡冲照大禅師一然撰, 『新羅国東吐含山華嚴宗仏国寺事蹟』, 1046
年.

外務省外交史料館所蔵

「本邦鉄道関係雑件」(B-3-6-8-26).

国立公文書館所蔵

『太政類典・第一編・慶応三年』, 1867年.

柳希齡, 『標題音註東国史略』, 不明.

東京大学文書館所蔵

「坪井九馬三関係資料」.

京都大学附属図書館所蔵

朴祥撰, 『東国史略』卷1, 1522年.

早稲田大学図書館所蔵

『東国通鑑』卷之一, 不明.

韓国語文献

金鐘俊, 『植民史学と民族史学の官学アカデミズム』, ソミョン出版, 2013年【韓国語】.

パク・サンヒョン, 「翻訳から発見された朝鮮(人)－自由討究社の朝鮮古書の翻訳を中心に－」, 『日本文化学報』第46輯, 2010年8月【韓国語】.

崔南善, 「檀君否認の妄－『文教の朝鮮』の狂論－」, 『六堂崔南善全集』第2卷, 玄岩社, 1974年(初出: 『東亜日報』 1926年2月11日付(上), 2月12日付(下) 【韓国語】.

「韓国近現代人物資料」, 『韓国紙データベース』HP,

http://db.history.go.kr/item/level.do?levelId=im_215_23510, 【韓国語】.

英語文献

Asch, S. E. : Opinions and social pressure. Scientific American, 193, pp.31-35, 1951.

拙論, 「記紀による「一国一神話化」と檀君伝説」, 『北方人文研究』第12号, 北海道大学大学院文学研究科北方研究教育センター, 2019年3月.

拙論, 「建国神話の政治学－檀君神話を中心に」(2020年度博士学位論文).

【ABSTRACT】

Dangun study by Japanese

Kitayama shoko

The purpose of this study was to empirically elucidate research on Dangun in modern Japanese and provide a comprehensive view of its characteristics. The study referred to the document collection *Japanese Dangun Research*, provided by the Hongik Foundation in the Korea-Japan Joint Study to Establish the Histories of Dangun/Ancient Korea and East Asia supervised by the foundation. Specifically, the essential points of the 18 Dangun studies noted in the collection were analyzed. Subsequently, the characteristics of the respective studies were examined while taking into account the backgrounds and careers of the 14 Japanese authors of the papers. Finally, the perspective of historiography was also considered, noting how Japanese research on Dangun was influenced by Japanese national identity, which was abruptly formed in modern Japan.

【Key words】

Dangun studies, national identity, study of modern history, founding myths, Japanese

